

---

SaGa-Your song is my song-

パス太

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

S a G a - Y o u r   s o n g   i s   m y   s o n g -

### 【Nコード】

N 9 5 9 8 Y

### 【作者名】

パス太

### 【あらすじ】

スクエア（現スクエニ）で発売されたS a G aシリーズのクロス物です。

時間軸メインはロマサガ3を基本としております。

主人公はユリアン。ヒロインはモニカですので、それが気に食わない人は見るのを止めておいたほうがいいかもしれません。

しばらくは多少改変しておりますが、原作準拠です。

以前は某サイトに投稿しておりましたが、パスを忘れてしまい新た

にこちらで投稿させていただこうと思いました。  
駄文ですが感想をいただけると作者は泣いて喜びます。

## opening

この世界で最も大きな街は何処かと聞くと、人々は皆一様にピドナを思い浮かべるだろう。

西に行くと、古の魔王がそこで悪逆の限りを尽くしたと言われる魔王殿がある。魔物やならず者が逃げ込んでおり、観光客などは荘厳な外観と雰囲気だけ味わって満足して帰るピドナの名物スポットだ。

東には世界各地の船はここに集まると言われる巨大な港がある。

ピドナは世界の中心にある街と言われており、実際世界中から集められた様々な名物品や貴重な物資が集まっており、市場への経済効果は計り知れない。

北には近衛軍団長ルートヴィツヒが治める王宮と新都市があり、世界一と言われる工房がある。良質な武器と防具を優秀な職人が手間暇かけて作り、これもまたピドナの経済効果に一役買っている。

様々な娯楽や名所が立ち並び、間違いなく世界中で最も栄えている街であると近衛軍団長ルートヴィツヒは言う。屈強な戦士や、気ままな旅人、抜け目のない商人、王国の貴婦人も口を揃えてピドナは最高の街であると言う。

しかし、それは。

「退屈だ」

子供も同じ気持ちだとは、限らない。

「馬鹿みたい、こんな騒がしいだけなところで、馬鹿みたいに騒いだりしちゃってさ」

騒がしい酒場の中、少年は椅子に座り、地面まで足りない脚をブラブラさせながら呟いた。

安っぽいテーブルに突っ伏し、コップを眺めてみる。安っぽいテーブルの上の小さなグラスは、つい先ほどまではオレンジジュースが入っていたが、ずいぶん前に飲み干して今は溶けかけた氷しか入っていない。

「むー……」

オレンジジュースよ、出てこい、とグラスを覗みつけるが、当然湧き出るものではない。厨房から料理がどんどん運ばれてくるため、ウェイターもウェイトレスも忙しそうに料理を配膳しており、少年に気づく様子もない。

コップを覗みつけるのも飽きたのか、少年はふいっと横を向く。

「いい加減、帰ろうよ……暇だよ」

次々と不平不満を口にする。悪いのは退屈している自分を放っておいて、大人たちだけで楽しむ両親が悪いのだと結論づけるが、それはあながち間違っただけではないなかった。

ピドナの酒場は様々な人が出入りするためかなり大きいが、お子様は基本お断りである。当然子供用のご楽用品などおいているはずもなく、十にも満たない少年が、酒場の大人連中の中で楽しく遊べるわけがなかった。

まあ少年と両親がここに来てから、まだ三十分も経ってもいないのだが。

「はあ。　　ねえ……お父さん、お母さん」

ため息をつきながら少年は、隣に居る父の顔を見上げた。

少年の父親は眼鏡をかけた男と親しげに話していた。やれあの頃は無茶ばかりした、今でもそれ程変わってないだろうと、話は盛り上がっておりしばらく終わりそうに無い。

少年は父親から目を逸らし、隣のテーブルへと移動した母へと目をやった。

母親もまた、緩やかな緑の髪の小柄な女性や、ポニーテールにした女性と楽しそうに談笑している。変わらないわねと髪を上げた気の強そうな女性が言ったのを少年はこっそりと頷いた。自分が赤ん坊だった頃のアルバムを見ても、今の母と全くと言っていいほど変わりがなかった。

周囲を見渡してみると、誰もが楽しそうな顔をしていて、少年一人だけ暇そうな顔をしている。

来なければよかったと少年は肩を落とした。

十分後、退屈に耐え切れなくなった少年は、未だ話が終わりそうに無い両親を放っておいて一人酒場の中を歩いていた。

「うわぁ……」

少年が左に目を向けるとステージがあり、そこでは妙齡の赤い服と黒いタイトなズボンを身に纏った女性が激しく踊り続けており、そのステージの最前列で眼帯をつけた筋肉隆々な男が、声を張り上げステージ上の女性に手を振って己をアピールしている。

「すごい」

少年が右に目を向けると、鉢巻をした男が、きわどい服を着た気の強そうな女性とその女性よりさらにきわどい水着のような服を着た耳の長い女性に腕を引つ張られている姿があった。

周囲の人間は全く止める気配が無く、むしろどちらがその男性の心を射止められるか賭けを始めている。

「これは」

奥のテーブルではシスターが酔って、隣にいた男を殴り飛ばし友人らしき男性と女性に取り押さえられていた。

殴られた男は泣きそうな顔をしながら必死で許してくれと懇願するが、女は細胞の欠けらからでも復活できるでしょうがと物騒な事を言っている。

「面白いかも」

少年は嬉しそうに笑った。

「もつと早く周ってたらよかったかも」

あれから少年は、緑色のトカゲ男と赤色のトカゲ男が文化と芸術がどこのこののと語り合っているのを物珍しそうに眺めてみたり、血のように紅いワインを一人優雅に飲んでる男を怖いぐらいに絵になると感心しながら眺めたりと、のんびり時間を潰しながら歩いていた。

覇気の無い痩せた店員からジュースを受け取り、そろそろ両親のもとへ戻ろうかと考え始めたところで、ふいに少年は壁際で一人佇んでいる女性が目に留まった。

いや、女の人じゃない、男の人かも。少年にはその人が男か女か見分けがつかなかった。

少年に分からないのも無理は無かった。

彼はとんがり帽子を目深にかぶっており、傍目にも男か女か区別がつかなかった。

低いというわけではないが長身というほどでもなく、痩せているようにも見えるがひ弱そうな感じもしない。

安そうな旅人用のローブを羽織っていたが、その両手には衣服に不釣り合いなほど高価そうな銀色の豎琴を持っていた。

窓の外を眺める彼の姿はどことなく神秘的に見える。

どこにでも居そうどこにも居ないような、なんとも不可思議な存在であった。

どれだけの時間が経ったのだろう。

ふっと彼が笑ったような気がした。  
その目が自分を見ているような気がした。

否、自分を見ている。  
少年は気付く。

窓の外を眺めていた彼の目は、いつの間にかしっかりと少年のほうへと向けられていた。  
少年はその目に吸い寄せられるかのように彼の元へと向かっていった。

「君の名前は？」

彼の第一声は少年の名前への問いであった。

「僕はジェラルル」

少年、ジェラルルは答えた。

「そうか、いい名前だね」

彼はジェラルルの頭を撫でながら言った。

「ええと……おじさんの名前はなんて言うの？」

今度は少年の聞く番だった。  
内心で男の人か女の人か分からないけど、たぶん男の人だ、でも間違っていたら謝ろう、と考えながら。

「おじ……まあいいけどね。僕は、詩人だよ。それ以上でもそれ以下でもない、どこにでもいる詩人さ」

答えになってないとジエラルルは思った。  
そして気付く。 やっぱり男の人だったと。

「ジエラルルはどうしてここに？ 子供はここに来てはいけないよ」  
諭すように、確認するかのように詩人は言った。

「父さんと母さんが連れてきたんだ。何かよくわからないけどお祝いだって」

それからジエラルルは詩人ととりとめのない話をした。

両親の話、友人の話、学校の話、この街の話、殆ど一方的にジエラルルが話していた。ときおり愚痴も混ざるが、詩人は嫌そうな顔を見せずむしろ楽しそうにジエラルルの話のときに相槌を打ちながら聞いていた。ジエラルルも詩人が楽しそうに話をきいてくれるので、さらに饒舌になってゆくのだった。

「それでね、ローニン先生がおたま先生に十手でなぐられてね、ローニン先生気絶したんだよ。剣術の師範なのに先生すつごく弱い」

「ははは、ローニン先生も災難だね」

「うん。僕の家も母さんの方が父さんより強いし、どこの家でもそ

うなのかなあ」

「きつとそうだよ。 ジェラルルはお父さんもお母さんも好きかい？」

「もちろん好きだよ。 父さん思いっきり遊んでくれるし……ときどき僕を息子と忘れるほど熱中するけど、母さんもおいしい料理作ってくれるし……たまに失敗するけど」

「そっか。 親子いつまでも仲良くするんだよ」

「うん。 ところで詩人さん……」

ジェラルルは詩人のそばに置いてある豎琴を指差した。 詩人は軽く豎琴を持ち上げ少年の目を見つめる。

「聴きたいのかい？」

「うん」

ジェラルルと詩人がステージを見てみると、先ほど踊っていた女性の姿はもう見えず、演奏、演劇募集の札が掛けてあった。

「……わかった。 いいよ」

「ほんと？」

「うん」

詩人はゆっくりとステージに向かった。

ジェラールは急いでステージの正面、最前列に座り、詩人が壇上に上がるのを待った。

詩人が舞台上がる。

そして恭しく頭を下げ、厳かに歌い始める。

ここに始まるは遙かなる戦いの詩

様々な生物と異世界が交わる不思議な詩

そして運命に導かれた仲間たちの詩

この詩をうたい終えられるよう精霊よ、我に力を与えよ！

いつの間にか酒場の中はしんと静まりかえっていた。  
一人も声を上げようとする者はおらず、みなステージに釘付けになっっている。

詩人は何も構うことなく、言葉を重ねてゆく。

今は昔、年若きロアー又侯ミカエルが小さな帝国の君主の時。

大陸は麻のように乱れ争いは絶えなかった

ジェラールは詩人から目を離すことが出来なかった。

歌い始めてまだわずかであるが、既に物語に引き込まれている自分を感じていた。

この物語はきっと長くなるだろう、ジェラールは何となくそう感じ取る。

嵐の夜、一人の少女が馬を走らせていた。

風と雨と稲光は、少女の体力と気力を容赦なく奪ったが、少女は無理に気を飛ばして馬を走らせる

先に根を上げたのは馬の方であった

馬はその場で歩く事を止め走る気力を失った

全く歩こうとしない馬に業を煮やした少女は、馬を見捨て歩いて行く事に決める

数度、馬の方に振り返ったが、やはり馬は歩こうとせず少女を見送った。

とぼとぼと一人遠い兄の元へと向かう少女は、草葉から漏れる小さなあかりを見つける

そのあかりは小さな村から漏れた暖かな光であった

少女は村で馬を貸してもらおうと足を進める

嵐の夜、少女は小さな村へと降り立った

そして物語は片田舎の小さな開拓の村、シノンから始まる

## 雷雨の中の訪問者

酷い雨だ。あいつら今日は見回り早めに切り上げるだろうな。

雷雨で荒れ狂う中、見回りをする四人の若者たちの姿を思い浮かべながら、マスターはグラスを拭きつつ客に聞こえない程度の声で呟いた。

店内には客は一人しか居ない。

普段なら誰彼構わず陽気に話しかける彼だったが、客は深く記憶の海に埋没している様で、どうにも彼は話しかけるのは躊躇われた。変わった客だとマスターは思う。

この店は建てられて十年と経っていないが、客の入りは良い。

今日はたまたま外の嵐のせいで普段よりも客の入りは悪いが、何事もない今の時間帯なら仕事帰りの村人で賑わっているはずであった。

そんな嵐の中、一人の旅人が現れた。

たまたま足が向いたのか、名物の地酒を飲みにはるばるやって来たのか、道を間違え野盗に追われたか、はたまた野盗本人か。

少し毛の生えた程度の野盗ならば、マスター自身もある程度武術を嗜んでいるので軽く返り討ちにする自信がある。まあそもそもこんな貧乏くさい食堂を襲っても金なんかないわけだが、と思っているが。

埒もない考えから、意識を旅人に戻す。

問題は男が普通の旅人とあまりにも違って見えることだ。

客の男は、色黒で南東のナジユの血を色濃く受け継いでいるように見える。漆黒の髪は全て後ろで括っており、彫りの深い精悍な顔をおしげもなく見せていた。擦り切れた服の上からでも身体全体がしなやかな筋肉で覆われている事がわかり、その姿はまるで南国に住む黒豹のようである。

また、腰にはかなり使いこまれたであろうボロボロの鞘にさされた曲刀があった。しかしその曲刀の柄のなんと美しいことが。相当の値打ちものだと思つた。

そしてこの気品すら漂う旅人は何度血なまぐさい夜盗やモンスターに襲われたのであろうかと。

このシノンという村は、いまはまだ発展途上の村であり、深い森で囲まれている。

人口は百人に満たず、村自体もお世辞にも豊かとは言えない。

森には、山賊やゴブリン、蛇や凶暴な獣が巣くっており、幾度となく村は襲撃されている。

そのため、村の周辺をいつも4〜5人のパーティを組んで村の若者たちが見回りをしている。

その若者たちの集会所であり解散場所が、村唯一の食堂であり酒場も兼ねているこのマスターの店なのであるが、それはおいておこう。

これといって特徴もない村であり、酒は確かに名物であるが、決して輸入できないほど珍しいものでもない。そんな村になぜこの色黒の旅人はやってきたのか、マスターは不思議でならなかった。

「そろそろかな…」

ポコポコとコーヒーが沸く音を聞きながらマスターは呟いた。

「……なんか言ったか、おやじ」

「！？ あ、いえ、そろそろ村の自警団の奴らが戻ってくるだろう  
など」

突然、何気なしに呟いた言葉に反応されたマスターは、男の言葉  
に一瞬動転した。

すぐに返事を返し、客に対して気を抜きすぎていた自分に心の中  
で喝をいれる。

男はああと、興味なさそうに相槌を打つ。そして話は終わった  
といわんばかりに、一息に酒をあおった。

店に来てからずっと無表情であったが、そのとき初めて男の顔に  
変化が起こった。

「おやじ、なかなかいい酒だな」

思考の海に埋没しすぎて酒の味に気付かなかったのであろう。

改めて感じる酒の味に、男の顔に苦笑が浮かぶ。

酒の味に気付かず、ただ水のように飲んでいたのがもったいなか  
ったと言わんばかりに。

「へへっ、自家製の特別品ですよ。お客さん、このあたりの人じ  
やないね？ かと言って開拓に来たようにも見えない」

自分の作った酒が褒められたのが嬉しかったのか、ふとマスター  
は話題づくり自身自身が疑問に思っていたことを口に出した。

「ああ、開拓者じゃない。 たまたま足がこつちに向いたんだ」

マスターも一時、見知らぬ土地を旅して世界を見て回りたいたと思  
ったことがある。

知らぬ土地を歩き、人に害を与える魔物を知恵と勇気と正義の力  
で屠り、財宝を発見する。

子供じみた夢だと思いつつも、若き日の憧れはそう簡単には消え  
なかった。

「旅暮らしですか、いいですね。 ナジュ砂漠の方からいらした  
んですか？」

半ば本気で羨ましがりつつ、マスターは男の出身地を聞く。

「砂漠か……もう何年も目にしてないな」

問いの答えになるのか、ならないのか。

マスターが首をひねっているうちに、またも客の男は記憶の海に  
沈んでいくのだった。

男が『姫……』と呟く声を聞きながら、二十分が経った。

マスターはこの客がどこぞの騎士であろうかと予想しながらグラ  
スを磨いている。

その時、騒々しく店のドアが開かれた。

「くっはあ、酷い雨だぞ。マスター」

「全くだ。しかしこの嵐だとゴブリンも夜遊びはやらないだろう。」

ゴブリンは稲光を嫌うからな」

「ふう……こんな日に見回りなんてやらなくてもいいじゃない。」

あ、もう……サラ、早く入りなさい。風邪引くわよ」

「あ、うん……」

現れたのは毛皮でできたコートを着た四人の男女であった。

この嵐の日に外に出る人村人はいないと思っていたのであるう、騒ぎながら四人は店の中に入っていく。

とはいえ客が、居ようが居まいが大人しく静かにするといった面子では無かったが。

「おかえり。　ユリアン、トム、エレン、サラ」

棚からタオルを出し、マスターは手馴れた様子で苦笑しながら四人にタオルを渡した。

四人の男女は、それぞれ渡されたタオルで濡れた顔や髪を拭いた後、四人がけのテーブルに席に着いた。

その時一人の緑色の髪を立たせた青年が、隣に座っている眼鏡の青年に顔を寄せる。

「トム、すこしだけエレンと話がしたいんだけど」

ユリアンと呼ばれた少年は、トム、トーマス・ベントにエレンとサラに聞こえないよう、そっと耳打ちした。

トーマスは、いつもこの四人のムードメーカーであるユリアンが、男勝りで勝気なエレンに対し、恋心を抱いているのを知っていた。

いや、ここにいる旅の男以外全員、ユリアンがエレンに対し恋心を抱いているのを知っている。

それは当のエレンでさえも。

「ああ、わかったよ。サラ、ちょっと手伝ってくれ。何か料理を作るから」

まだこりないのかとトーマスは内心ため息をつきながら、テーブルの向かい側に座っているサラに呼びかけた。

うん、と短く答えサラは席を立った。

「マスター、キッチン借りるよ。材料費は後で請求してくれ」

「ああ、いいよ」

マスターも穏やかな顔をして頷いた。

「なあ、エレン。ヤーマスからの船がミュルスの港に着いたらいいぜ」

トーマスとサラがキッチンに入ったのを確認したユリアンは、すぐさまエレンに話しかけた。

「ふうん、そうなんだ。それで？」

エレンも内心でユリアンが何を言いたがっているのか気付いている。

勝気で喧嘩っ早いエレンであるが、そのぶん性格はさっぱりしており、ずるずる後を引きずる性格ではない。

そんなエレンは村の人間達からの人気が高く、よく男からモーションをかけられている。

エレンがユリアンの気持ちに気付くまで、そう時間はかからなかった。

「いろんなものがロアーヌに運ばれてくるんだ。珍しいものや美しいものまで。一緒に見に行かないか？ なんなら何か買うのもいいし」

あまりエレンが関心がなさそうなことに気付いていながらもユリアンは言葉を続ける。

必死で自分をデートに誘うユリアンを見て、エレンは言った。

「一緒に行くのは別に構わないわよ。でもね、ユリアン。あたしはどうしてもあんたを恋人とかそういう風には見れないんだ。子供のころから知り過ぎてるよ。そりゃ、昔はお嫁さんごっこかもやったけどね」

エレンはいつもの様にあっさりど、ばっさりど、ユリアンの思慕の情を断ち切る。

毎日のように、自分を口説こうとするユリアンに、エレンは疲れを感じている。

ユリアンは一瞬、無表情になったが、すぐにいつもの人好きする笑顔を浮かべ言った。

「ちえっ、まあいつかこっちに振り向かせて見せるからな。そんな時に、俺が良い男になってエレンのほうを向いていなかったとしても後悔するなよ？」

全く期待してないわと言わんばかりに、こめかみに手を当てながらエレンは投げやりに手を振った。

今日も振られたか…、さすがに辛いな。

ユリアンは思う。

振られ続けて早二年。 ああ、アリア…、お兄ちゃん挫けそうだよ……。

表面の態度とは裏腹にユリアンはかなり傷ついていた。幼くして死んだ妹に、ユリアンは心の中で涙を流しながら呼びかける。

明らかにうざがられてるし……、少しは俺の気持ちに伝えてくれよ……エレン。

ユリアンは妹を亡くしふさぎこんでいたが、エレンの持つエネルギーギッシュな性格に救われた。

しかしそれまでユリアンは、エレンへの憧れは持っていたが思慕の情は持っていなかった。ユリアンとエレンが十八の時、村で行

われた腕相撲大会の決勝戦でユリアンは数年ぶりにエレンの手を握り、その握った手の小ささに驚いた。

ずっと近くにいた友人が、いつの間にか女性に変わっていたことを知り、憧れの感情が恋に変わったのはこの時である。

ユリアン・ノール、齢十八での初恋であった。

はあ……めんどくさいなあ。

ユリアンがいつもの笑顔を浮かべながら苦悩している姿を横目で見ながらエレンも思う。

恋愛は楽しくて素晴らしいものだって人は言うけど、あたしはそんなの全く興味無いし……なにより馬で走り回ったり格闘の訓練してる方が楽しいし。

色恋沙汰には全く興味が無いエレンは、誰が言い寄っても決して誰かと付き合おうとしなかった。

無理に迫ってくる輩には平手を飛ばすことも珍しくなく、それでも迫ってくる輩は自慢の格闘術で叩きのめしている。

ユリアンが刷り込みの感情で迫っていると思っているエレンは、自分に責任があると考え、ユリアンに手を上げることができなかった。

なによりサラがいるしね……。もう少しサラがしっかりしてくれたら、あたしも旅に出て世界とか見て回るんだけど。

その心の中で考えながらエレンは、キッチンでトーマスの手伝いをしている妹に目を向けた。

サラは玉葱をきざみながら、何度も目を瞬かせている。

この年十七になる頼りない妹の姿を見て、エレンは再びこめかみに手を当てた。

そのときふいに、カタン…と風に吹かれたような小さな音を立てながら店のドアが開いた。

店内にいる全員の視線がドアに集中する。

そこに、

「馬を、貸して、ください……」

少女がいた。

「必ず……後で返しますから」

泥だらけで、傷だらけで。

「私は……モニカ……」

ドアの開く音より更にか細い声を発しながら、気力だけで立っている、

「……モニカ・アウスバツハ。　ローヌ候、ミカエル・アウスバツハ……フォン・ローヌの……妹です」

とても美しい皇女がいた。

## 皇女の嘆願

それだけ言うとモニカは膝からへたり込んだ。

荒い息を吐きながら両手を床につきへたりこむが、情けない姿を見せたくないのか必死で立ち上がろうと足に力を入れる。しかし張り詰めていたものが切れたのであるう、端正な顔を歪め歯を食いしばるが、泥で汚れた足は寒さと疲労で細かく震えており、とても立ち上げられる様子ではなかった。

突然の来訪者に、店にいた面々は驚いた顔を隠せずに立ち竦む。吹き付ける嵐の中、巡回を終え疲れて帰ってきたら唐突にシノン、否シノンを含む貿易都市ミルスやタフタヌーン山などロアー又地方を統べる自国の皇女に助けを求められるなど、誰も想像できなかったであろう。

最初に我に返ったのはユリアンであった。

この少女が王族であろうが、はたまた大嘘つきであろうが、今は関係ない。目の前に倒れそうなほど疲労している少女がいるのに、それをただ立ち尽くし眺めているだけなど、正義感の強い青年に出来るわけがなかった。

椅子を跳ね飛ばすように立ち上がり、少女に駆け寄る。

「お、おい。大丈夫か」

その姿を見たエレン、サラ、トーマスは弾かれた様にモニカに駆け寄った。

「何があつたんだ！？ 酷い有様じゃないか」

ユリアンはモニカの前で膝を着き、手を差し出しながら焦るよう  
に問うた。

モニカは差し出された手に一瞬躊躇したが、おずおずと手を近づ  
け手を重ねた。

重ねられた手をしっかりと握り、勢いよくユリアンはモニカを引  
き寄せる。引つ張られたモニカは、たたらを踏みながらも何とか  
転ぶことなく立ち上がる。

そしてぼつりぼつりと話し始める。

「ゴドウィン、男爵と大臣が反乱を起こしました……。早くお兄  
様に伝えないと、ロアーヌが、国が乗っ取られて……」

モニカは悔しさに顔を俯かせてぼつりと言う。

自国の、しかもそれなりに付き合いの長かった人間に裏切られる。  
見ず知らずの人に身内の恥を晒す事、生まれ育った愛国ロアーヌ  
が危険な状態である事、早く兄にこの反乱の旨を伝えないといけな  
い事、そしてここまで来るのに不安で不安で仕方なかった事、様々  
な感情が入り混じってモニカは肩を震わせる。

ロアーヌの宝石と言われた母譲りの金色の髪も、今は雨と泥にま  
みれており力無く垂れ下がっているように見える。

「でも、なんであなた様が、モニカ様がここに来たんですか？ 知  
り合いか友人の家で匿ってもらったり、保護してもらうのが妥当だ  
と、思うのですが……」

緑色の髪を首の上で括った少女、サラは引つ込み思案であり、初対面の人であつてもなくても人見知りをしてしまう。目の前の少女は田舎者である自分たちとは違い高貴な雰囲気を纏つており、夜盗の類とは全く思つてはいない。かといって突然皇女だと言われ、て信じるにはまだ早い。

「本当に信じられる人は、私には居ません。もしいたとしても既にその人たちにゴドウィンと大臣が手を回しているでしょう。そうでないとしても、私を匿えばその人たちに多大な迷惑をかけてしまう……。ですから人質となりうる私が伝令となり、一刻も早くお兄様の元へ向かわなければならぬのです」

少女は、悲壮な覚悟を身体を震わせながら伝える。

きつとこの少女の言っている事は真実であろう。

身に着けているのは肌をしつかりと覆う赤色の旅服。軽く丈夫で王族のものと思えないほど機能優先に作られたそれは、激しい雨に打たれ重たそうに肌に張り付いている。

また腰には護身用のレイピアを差していたが、今の少女の姿からとても戦えそうには見えない。

それでも少女は行くだろう。愛するたった一人の肉親である兄とロアーヌの民のために。

その決意に絆されマスターはつい口を滑らしてしまう。

「ああ、えーっとだ……。馬ならある」

マスターは柵からタオルを出し、モニカに手渡して言った。  
その言葉にモニカは勢い良く顔を上げる。

その必死そうな顔に内心しまったと思うが、一度放った言葉の矢  
はもう元には戻せない。

「お願いします！ 必ずお返ししますから、馬を貸して下さい」

早口に言葉を紡ぐ。タオルを胸元で握り締め、濡れた髪を顔に張  
り付かせながら、モニカは懇願する。

「お願いします、どうか、どうか……」

恥を捨て、平民であるマスターに何度も何度も頭を下げる。

その姿には兄を助けたい、ローヌを救いたいという真摯な思い  
があり、店内に居た誰もに手伝ってあげたいという気持ちを芽生え  
させた。

「やめておけ。その姫さんの言っている事は真実だが関わり合いに  
はならん方がいい」

否、一人だけ関わり合いになりたくないと思っている男がいた。

その言葉にユリアンは激昂した。

「お前！ 先代のフランス様も今のミカエル様も俺たち開拓者の為  
にモンスター共と戦ってくれてる。それにこの子……モニカ様が  
覚悟を決めここまで来て下さったんだ！ それなのに」

ユリアンはこぶしを握り締めながら色黒の男に怒気を飛ばす。  
男はユリアンの怒りを軽くかわしながらグラスに酒を注ぐ。

「まあ聞け。先代のロアー又侯フランツが死んでからまだ三ヶ月だ。ミカエルが後を継ぐと決まったときもゴタゴタがあつたようだ。怪しいと思わないか？」

そう言つて男はグラスを傾け酒を口に含む。

モニカに視線を飛ばし、そしてゆつくりとユリアンに視線を向ける。

モニカは全て分かつてるという顔で、ユリアンは真面目な顔でその真意を読み取るうとしていた。

「候爵位を狙っている奴がいるんだよ。そのゴドウィンとか言う男爵と大臣だな。ミカエル侯がロアー又を留守にしている今が絶好のチャンス、逃す手はあるまいよ」

「そこまでわかつていて何故！」

ユリアンは叫ぶ様に男に言った。

男は鼻をフンと鳴らしながら言う。

「金にならんからだ。ミカエル侯が侯爵で無くなれば一オーラムの金にもならん。モニカ様、あんた今、金を持っていないだろう？」

モニカは宝石を一つも身に着けていなかった。

旅装束に着替えてから重く邪魔になるといふ事で、全ての宝石の類は部屋置いてきたのである。

「俺は前金じゃなきゃ仕事はしない主義なんだ。人助けもその仕事の内だ。そういう事だからお前も……」

「もういい、お前の力は借りない」

ユリアンは今度こそ本気で怒った。

この金で動く男に人間の情というものをわからせてやりたかった。

「俺がモニカ様をミカエル様のところまで安全に送り届けてみせる。モニカ様、同行を許して貰えますか？」

モニカに対する口調こそ穏やかだが、有無を言わさないものが含まれている。

しかし、

「なりません！ その気持ちはありがたいのですが、危険です」

モニカはすぐに却下という判断を下した。

「モニカ様！」

「おじ様、馬を貸してください」

ユリアンの願いを耳に入れないことにし、未だ疲労の濃い顔でモニカはマスターに詰め寄る。

「しかしなあ……」

マスターも馬を貸してやりたいのは山々だが、一国の皇女を危な

い目にあわせるのも気が引けた。危険な目に遭わせることは出来ない、かと言って見捨てることもできない。だから条件を付ける。

「ええと……モニカ姫様、こいつの同行を許してやってくださいませんかね」

マスターはユリアンを指差して言った。

モニカは睨むようにマスターを見つめる。

「ユリアンは一応筋の通った男です。困っている人を見捨てることあできません。ロアーヌの民を守ろうとしている貴方を、ロアーヌの民であるユリアンは守りたいと思っていますのです。世話を焼いてくれる人に恩返しをしたいんです。どうかその気持ちを汲んでくれないでしょうか？」

マスターはモニカに諭す様に言う。

モニカはユリアンの顔を見つめた。今まで皇女として聞かされ飽きてきた世辞でもなく、ロアーヌに危険と不穏が立ち込めている中、ただの一村民が共に行くと言ってくれている。金や名誉の為ではなく、一人の人間として自分の身を心配してくれる人がいて嬉しかった。

今までは尊敬する兄や頼りになる姉のような存在もいたが、今はこれまでの人生で初めて一人きりという状況である。信頼できる人は一人でもいたほうがいい。

「いえ、ですが……」

だからこそ、その好意に甘えるわけにはいかない。この優しい

人を危険な目に遭わせたくなかった。

「でも、それでも危険です……」

「ふむ、それなら仕方ない」

マスターは腕を組み、深く考えるように首を傾げる。

「危険では無くなればいいんですね？」

マスターはニヤリと笑う。

「トーマス、エレン、サラ。お前たちも手伝ってさしあげるんだ  
る？」

それまで口を挟むことは無かった三人は突然のマスターの問いに  
言葉を失ったが、ジワジワと少しずつその言葉を理解していく。  
そしてモニカとマスターに向かい満面の笑みを浮かべ言った。

「もちろんです」

「当たり前でしょ。モニカ様を心配してるのはユリアンだけじゃな  
いのよ」

「少し怖いですが頑張ります」

「ふーっ、ならばお前らはお前らで好きにすればいい。俺は知ら  
んからな」

やる気になっている四人とおろおろしているモニカを横目に、話は終わりとはかりに男はグラスをあおる。

「マスターは男に近づいて言った。」

「お客さん、ここには金は無いですが馬ならあります。これでモニカ様を助けてやってくれませんか」

マスターは男のグラスに酒を注ぎ足す。

「馬か……シノンの馬は良馬だと聞く」

男は目を瞑って素早く頭を回転させた。危険と儲けを計りに掛け、数秒後に納得したのか、軽く頷く。

「……いいだろう。おい、お前たちの名前は？」

ユリアンは胡散臭そうな顔をしながら、目の前の強欲な男を見る。その視線を無視し、男は顎でユリアンに名前を言えとジェスチャーをした。

「なんだよ、こいつ……ユリアンだ。ユリアン・ノール」

「トーマス・ベントです。仲間からはトムって呼ばれています」

「エレン・カーソンよ。こっちは妹のサラ」

「サラ・カーソンです」

「モニカと申します。先ほど自己紹介しましたわね」

各々自分の名前を告げていく。

そして最後に男が名乗った。

「ハリードだ。この曲刀カムシンの名にかけてモニカ姫を無事にミカエル候のところまで送り届けてやるさ」

色黒の男、ハリードがカムシンの名を告げたとき思わずマスタは声を上げてしまった。

「曲刀カムシン！ あんた有名なトルネードか！」

「俺をそう呼ぶ奴もいるな。さて、一眠りだ。起きたら腹こしらえて夜明け前に出発するぞ」

そう言ってハリードは荷物をまとめ店の入り口に向かう。

「待つてください、今すぐ出発しましょう」

根を上げずにモニカは入り口に向かおうとする。  
しかし数歩歩いただけで、足がもつれ転んでしまう。

「あう……」

すぐさまエレンがモニカに駆け寄る。

「モニカ様、大丈夫ですか？」

エレンがモニカを介抱する様子を一瞥することもなく、ハリードは言った。

「今のおんたの様子じゃ出発して十分も持たない。　発つのは今夜の雷雨が明けてからだ。　さあ休んだ休んだ！」

そう言い残しハリードは激しい嵐の中に消えていった。

バトル！

「さて、モニカ様。ミカエル候がキャンプを張っている場所はどこだ？」

ハリードは曲刀の柄を握り締め、モニカに場所を確認する。

「この森の過去に古戦場となった場所に軍を敷いていると、カタリナ 侍女から聞きました。本来は私が来たこの道を一直線に走っていれば着くのですが……」

「こうなっていたわけだ」

早朝早く、モニカ達は村を出た。昨日モニカの馬とはぐれた場所まで戻り、モニカは一縷の望みをかけ愛馬がまだ残っているか見渡すが、馬はすでに姿を消しており、蹄の後もぬかるんだ地面によりどちらに逃げたのもわからない。

仕方なく馬を諦めたモニカは、借りた馬を走らせミカエルの陣まで向かう。

道は昨日降った雨のせいで若干滑りやすくなっていたが、六人六馬が走るのに特に支障はない。急げば兄、ミカエルの陣を張っている場所まで二時間もかからないはずである、が。

問題はその先の吊り橋にあった。

本来、モニカの間かうミカエルのいる古戦場までの道には吊り橋があるのだが、その吊り橋は昨夜の嵐のせいで壊れて流されたのか、跡形も無くなっている。崖の下は昨日の降り続いた雨で増水しており、勢いを増している。

「一刻も早くお兄様にロアーヌの窮地を伝えないといけないのに……」

私はこの道しか知りません、と言ってモニカは俯いた。そんなモニカを慰めるようにエレンは言う。

「仕方ありません、モニカ様。少し遠回りになりますが、この森から迂回して突っ切りましょう」

エレンは吊り橋のすぐ横にある森を指差しながら続ける。  
森は、適度に光が差し込み、とても凶暴なモンスターが蔓延っているには見えない。

「古戦場の場所は私たちシノンの者なら大人なら誰でも知っていますし、私たちも巡回の経験は浅いですが、何度か行っています……が、それは常に複数名のパーティを組んでいます」

「危険なのですな」

「そうです。森にはゴブリンなどのモンスターや凶暴化した鳥や獣、夜盗がたくさんいるのです。モニカ様、こんな事を言うのも何ですが、出来れば村で待っていて頂けませんか？ 後は私たちのみでミカエル候にお知らせしますのです」

「残念ながらそれは無理だな」

エレンの言葉を遮り、ハリードは無愛想な顔をしながら橋と橋をつなぐ杭に繋がれているロープを指差して言った。

「!? これは……」

それは自然の力で千切れたという感じではなかった。

トーマスは素早く屈んでロープの切れ端を握る。そして悔しそうに言った。

「鋭利な刃物で切られている。 やられましたね、どうやらゴドウィン男爵はモニカ様がここを通ることに気付いていたらしい」

トーマスは立ち上がり、モニカに向き合う。

「多分、待ち伏せする兵をここに配置していたのでしよう。あるいは早馬を飛ばして夜盗を金を買収したのかもしれない」

「おそらく後者でしょう。ゴドウィンと大臣の話の偶然聞いて、すぐに城を出ましたから……」

モニカは俯きながら震える声で呟いた。

あのまま、もし馬が根を上げずに走り続けていたらどうなっていたか。 考えただけで身震いする。

愛馬は、夜盗に感づきモニカを守るために止まったのか、雷雨の激しさに根も気力も失ったのか、モンスターの姿を捉え怯えたのか。 判断はつかないが、おそらくは守ってくれたのだらうと疑うことの苦手な少女は考える。 モニカは胸に両手を置いて今はどこかしれずの馬に感謝した。

「さて、夜盗がお留守の間にさっさと行くぞ。 もたもたしている時間は無い」

それだけ言うとハリードは森の中を歩き出した。

「お、おい。 馬は!?!」

ユリアンは焦ったように言う。

「どうやって連れて行くつもりだ。 開けた道ならともかく、障害物の多い森は視界も悪いし、モンスターも蔓延しているんだろうが。報酬はミカエル侯から直接貰う」

切って捨てるような言い方にユリアンは怒りを感じたが正論なので何も言い返せない。

「ユリアン、行こう。 馬を渋ってモニカ様を危険な目に合わせるわけにはいかないだろう?」

そう言ってトーマスも森の方へ歩き出した。

既にエレンとサラも馬を置いて森に入っている。

森は明るいいえ、視界はそれほどいいとも言えないだろう。なによりぐずぐずしていると、本当に夜盗が戻ってくる可能性がある。

「……………」

「ユリアン様、あの、そろそろ行かないと」

置いていかれる事が不安なのか、モニカも何度も森に目を向けながらユリアンに言う。

「…少しだけ待ってください、やることはありません」

それまで黙って馬のほうを見ていたユリアンは馬から目を離さず決意を秘めたような声で言った。

ユリアンは近くに落ちていた木の枝を拾う。

モニカはユリアンが何をするつもりか分からず、じっと見ているしかない。

そしておもむろにユリアンは木の枝を振りかぶり、

「!?!」

自分の乗ってきた馬の尻目掛けて叩いた。

「ヒビィー……」

馬は悲鳴を上げ、打たれた部分を赤く染めながら何処かへと走り去ってゆく。

突然のユリアンの思いもよらぬ行動にモニカは言葉もなく立ちすくんだ。

絶句しているモニカを尻目に、ユリアンはエレン、サラ、トーマス、ハリード、モニカの乗ってきた馬に鞭を入れるかのように尻を打ってゆく。

少しずつモニカは理解していった。

この青年がなぜわざと馬を傷つけているのかを。

最後の1頭が打たれ去ってゆく姿を見ながら、モニカは静かに言った。

「うまく逃げてくれるといいですね」

「……はい」

二人はそれ以上何も言わず、並んで森の中に入っていった。

その後すぐにハリード達と合流したモニカとユリアンは、ハリードの強い叱責を受けた。ハリードは馬の嘶きのせいで野盗が気づいたらどうするんだと、ユリアンの頭部に拳骨を食らわせる。

怒り心頭なハリードと、頭を抑え悶絶するユリアン。それをトーマスがなだめつつも、パーティのリーダーとしてユリアンに説教も忘れない。

モニカは頭を抑えしゃがみこんだユリアンを見て、クスリと笑った。

「ユリアンったら何かあったのかしら？」

「さあ？ どうでもいいけどね」

サラは興味深そうに、エレンは興味無さそうに我関せずと言わんばかりに眺めていた。

森は原始林になっており、木のところどころにむき出しの根が出ている。旅慣れたハリードや、森を遊び場に行っているユリアン達は問題なく歩くが、モニカはいちいち木の根に足を取られている。

「あつ。す、すみません」

「い、いえ。モニカ様。大丈夫ですから。ゆっくり歩いてください」

「ユリアン、鼻の下伸びてるわよ」

ユリアンは倒れ込んでくるモニカの華奢な身体と柔らかさを感じながら照れながら言う。

「そういう訳にもいきません。もう少し歩く速度を早めても私は……』あぶねっ!」……すみません」

モニカも男性と触れ合う免疫が無いのか、ユリアンに触れるたびに頬を染め足早になってしまふ。

そうしたことが続き結果、移動速度の低下という悪循環を生み出していた。

「ユリアン、あんたは後ろを歩いてな。このままじゃミカエル様のところに着くのが夜になっちゃうわよ……モニカ様、お手を拝借」

エレンはため息をついて、モニカの手をとった。

モニカは自身の不甲斐無さを体感し、エレンに子供のような扱いで手を引かれ羞恥に頬を染める。恥ずかしく情けなくもあったが、他人に手を握られる経験など、たまに王城で行われる舞踏会ぐらいであり、このようにしっかりと握られるのはほとんどと言っていいほど経験がない。

恐らく母と手を繋いで一緒に遊んだとき以来ではないだろうか。

モニカは今亡き母に手を引かれたときの事を思い出し嬉しくなった。

繋がれた手にギュツと力を込める。

「?」

エレンは突然強く握られた手に訝しみながらも手を握り返した。

森に入って二十分ほど経っただろうか。突然動きを止めたハリードは、周囲を素早く見渡し、一転に視線を集中させ言った。

「何かいるぞ、全員俺の後ろにつけ。密集するな、俺を支点に扇状の形だ。モニカ様はその中心にいな」

「私も戦えます」

「宮廷のお遊戯剣法じゃ犬も倒せん。モニカ様、あんた命を奪ったりした事ないだろう？」

そう言った直後、ハリードの視線の先の草場から、体長が一メートル程度の小柄な人影が飛び出してきた。大きな耳と醜悪な顔つきをしており、ボロボロな服、手にはその辺りで拾ったであろう大きな木の棒を持っている。

いや、一体だけではない。同じような姿をした者が三体。

「ゴブリンです……」

「まあ、これがゴブリンなのですね」

サラが緊張した面持ちで言うが、モニカは初めて見るゴブリンの姿に目を煌めかせている。『お嬢様が……』とハリードは思ったが、口に出すのも面倒くさい。

「キキキー！」

二体のゴブリンが棍棒を振り回し、先頭にいるハリードに向かって突進する。

「援護します」

「いらん、お前らはその姫さんを守っている」

サラが弓を向かってくるゴブリンに方向向けるが、ハリードはその言葉を切って捨てる。そしておもむろにゴブリンに向かって走り始める。

「ハリード、一人じゃ危険だ！」

槍を構えるトーマスの制止の声を無視し、ハリードは剣の柄に手をかける。襲う立場であったゴブリンは、逆に獲物が向かってくるとは思わなかった様で、虚をつかれたのか足を止めた。

そしてハリードは勢い良く剣を抜き放ち、そのまま勢いで抜刀、ゴブリンの首を跳ね飛ばす。そして返す刀で、もう一体のゴブリンの胴を袈裟懸けに切り落とした。

「速い……」

「あたたちよりも圧倒的に強いわね、あのおっさん」

感嘆のため息を吐くトーマスと、苛立ちながらも腕前を認めるエレン。

「もう一匹残っているぞ。お前たちもそれだけいたら、一匹ぐら

い倒せるだろう」

「なにを！」

ハリードの挑発的な言葉に、ユリアンは激昂する。

奇声をあげ向かってくるゴブリンの棍棒を愛用の長剣で受け流して、体勢が崩れたところをトーマスのロングスピアで肩を貫く。

エレンの手斧がゴブリンの肩を砕き、それが止めとなった。

「ふーっ、まあこんなものか　　サラ、八時の方向に弓を構える！　もう一匹いる！」

ハリードは曲刀を腰に差し直しながら、ユリアン達がゴブリンを蹴散らすところを眺めたが、サラに向かって一直線に向かってくる物に気づき、声を荒げる。

サラはハリードの突然の声に驚き立ち竦んだが、すぐさま弓を構える。消極的で体格は余り良くないサラは、筋力的な力は姉よりも劣るものの、運動神経、特に反射神経は姉よりも上だ。また、臆病な性格である彼女は、相手の行動をいちいち目で追ってしまう。それは後の先を常に意識している彼女の大きな武器であった。

冷静に弓を引きしぼり、地を疾走する狼、地狼に向けて矢を放つ。

「ギャイン！」

腰に矢を受けた地狼は、悲痛な叫び声を上げ矢を受けた反動で吹

き飛ばされる。しかし未だ戦意は失わず、ギラギラとした瞳でハリード達を睨みつける。

そしてその眼がモニカを捉えた。

「ッ！」

牙をむき、地狼は最後の力を振り絞るかのように、モニカに飛びかかった。

鋭い犬歯が並ぶ顎をひらきいた地狼は、脇目もふらずモニカの喉笛を裂こうとする。

「モニカ様！」

エレンが手斧を投げつけるが、とても間に合う距離ではない。あわや地狼の牙がモニカに届く寸前、モニカは低く身体を落とした。そして腰だめに剣を構える。

「ふっ！」

小さく息を吐き、丸められた身体をバネのように伸ばし、真っ直ぐ手に持った小剣、フルーレを突き出す。フルーレは地狼の開かれた口内を通り、頭を貫く。地狼は痛みを感じる暇もなく絶命した。

「はっ、はっ………」

誰もが声を失う中、モニカの荒い呼吸音が辺りに響いた



## 魔鳥ガルダウイング

「モニカ様、すごいです」

「まあ、そんな……たまたま攻撃が当たっただけですし、それよりサラ様の援護があっただけですわ」

「いえ、私なんて……距離があつたので落ち着いて狙いやすかったですし、何度か相手をした事がありますので。モニカ様こそ、初めての戦闘では……？」

「うふふ、侍女に剣技を教わっているの。本格的な戦闘は初めてだったので、狼の牙より侍女の剣の方がもっと鋭いし怖かったの。でもやっぱりサラ様の弓が……」

「そんな事ないです、モニカ様のほうが……」

戦闘が終わり、サラとモニカはお互いを賞賛しあっていた。お互いに相手を褒めちぎっているが、二人とも謙虚な性格故に、なかなか話が進まない。

「モニカ様もかなり度胸あるよな……」

ユリアンが呆然と呟く。トーマスは感心しつつ腕を組んで頷いた。

「ああ、しかし俺はサラの活躍に驚いたよ。俺たちの知らないところでも訓練して、いつの間にか成長していたんだな」

「宮廷のお遊戯剣法が、なんだって？ 犬どころか狼を倒しちゃったけど」

「……」

ユリアンは庇護欲を誘う皇女が狼を相手に引かず、逆に倒してしまったことに驚き、トーマスはサラの成長を純粹に喜んだ。エレンはニヤニヤと笑いながら、モニカに対し嫌味を言ったハリードを逆に嫌味で返し、ハリードは気づかない振りをして、明後日の方に目を泳がせていた。

その後も何度かモンスターに襲われたが、危うげなくメンバーは戦闘を進めていく。ハリードが率先して敵を蹴散らし、残った魔物を他のメンバーが、確実に止めをさしていく。しかし、モニカには一切戦闘をさせない。常に傍にユリアンが待機するように指示をだし、モニカ専属のボディガードをさせる。皇女を危険にあわせるなど普通あつてはならない事である、先ほどの戦闘は例外中の例外だとハリードの弁であり、他のメンバーもそれに異論はない。モニカ自身は不満そうな顔をしていたが。

「そろそろ森を抜けます」

初戦闘から三時間後、先頭を歩いていたトーマスは、同じく先頭を歩いていたハリードに言った。

「この森を抜けたらどの辺りに着く？」

「古戦場の南西の辺りですね。モニカ様の情報とこの付近の地形から推測してみると、そこがミカエル様の陣が敷かれている可能性が高いです」

「よく情報を掴んでいるな」

「叔父に仕込まれました。我が家の家訓で、戦いであれ勉強であれ情報を多く有する者が勝つと。まあ戦争なんて経験は、見るのも想像するのも初めてですので、当てにしないでください」

それを聞いたハリードは、トーマスの目を注視しつつ言った。

「よく言う。陣が敷かれている可能性が高いと断じている辺り、お前はすでにそこが陣を敷かれていると確信しているんだらう。」

人馬が休め、攻める分には視界は良好、それでいて行軍しやすい。戦争の基本で想像することは容易いが、戦争は生き物だ。天候や行軍速度、毎日に陣の場所が変わっても不思議ではない。戦争に参加したことの無い若造が、その事を踏まえての発言だとすると、お前はかなりの切れ者だ」

「買いかぶりすぎです。そういうハリードも戦争の経験が豊富と見えますが」

「実際に何度か戦争に参加しているからな。それよりもまた魔物がお出迎えだぜ」

「相変わらず目が良い。俺には敵がどこに潜んでいるかすら見え

ませんが」

「砂漠の民は目がいいんだ。それよりも気をつけな、既に敵の目は俺たちを捉えているぜ。サラ、エレン、ユリアン、モニカ様！頭上には気をつけな！今度の敵はちよつとばかり手強いぜ！」

頭上を見上げると体長が五メートルを超える巨大な怪鳥が高速で飛び回り、獲物を定めていた。

ユリアン達は即座に陣形を整え、各々の武器を手にする。

「ガルダウイング……この辺りで出るなんて」

エレンが呆然とした声を上げるが、トーマスも声を上げずに頷く。あれは古い図鑑でしか見たことのない魔物だ。本来は人も入れないような高山の山頂の崖壁に巣を構えている鳥系の魔物だが、普段はその体格に似合わず大人しい性格である。しかし、今日の前を飛び回る様子はどうだ。臆病な姿を見せず、辺りを旋回しつつ自分たちの周りを飛び回り、孤立した者をその巨大な爪で引き裂こうと狙っている。

ハリードは頭上を飛び回る怪鳥から目を離さず、舌打ちした。

「……あの野郎が地上まで降りてきたら、一刀に切り伏せてやるんだが」

「さすがにあの高さは難しいわよ……」

基本的に知能が低い魔物とはいえ、わざわざ空の利を捨てる馬鹿でもない。ガルダウイングは動きを止め、ホバリングを始める。獲物をハリードに定めたらしく、ハリードに向かって飛び掛った。

「チイツ」

その重量に加え鋭い爪をハリードの頭部に叩きつけようとするが、ハリードは間一髪横に飛んで避ける。もし、あの爪を直接頭部に受けたら、あっという間にハリードはひき肉になっていただろう。

砂埃をあげハリードは息を整え立ち上がるが、魔鳥はすでにその場にはおらず、空を旋回する。そして急降下を続け、ハリードに体当たりや蹴りなど体格を活かした攻撃を執拗に続けた。

そのたびにハリードは転がったり伏せるなどをして、避け続ける。

「糞がつ」

砂埃を巻き上げハリードは舌打ちをした。

「サラ、弓で援護するんだ！」

「駄目っ、早すぎて照準がつけられないの！」

防戦一方のハリードを見ていられず、ユリアンはサラの方を振り返り弓を使うよう指示を出す。しかし、敵のあまりの速度に弓の照準が定まらない。サラの顔に焦りが浮かぶ。

他のメンバーを見渡すと、エレンはガルダウィングから視線をはずさず、手斧を握り締めたまま動かない。モニカもトーマスも近接主体であるし、自分が離れると今度は彼女が的にされるだろう。

ならばトーマスにモニカを任せ、自分が討って出るしか。

そう考え、ユリアンはトーマスの方に顔を向けると、トーマスは視線をガルダウィングから外さないまま、何も無い空間でボールを抱えるかのように両手を奇妙に開き、小さく何かを呟いている。

「トム！」

「もう少しだ！　ここは汝の小さな箱庭　震えよ大気、集えよ暗雲　」

ガルダウィングの爪がハリードの腕を浅く切り裂いた。ハリードも曲刀を振るうが態勢が崩れており空振りに終わる。

「ちいい！」

飛びながら奇声を上げるガルダウィングを苦々しく睨めつけるハリード。その姿は致命傷こそ受けていないが、全身無数の傷で覆われている。

「ユリアン様、私たちも援護しましょう！」

「余計なマネはしようとするな！　標的をお前にされて、あつという間に餌食にされるぞ！」

モニカがユリアンに声をかけるが、ハリードはそれを聞き逃さずすぐに止めるよう叫ぶ。

「おねえちゃん……」

「サラ、弓をしっかり構えときなさい。必ずチャンスはくる」

サラもたまらず頼りになる姉に声をかけるが、エレンは不安そうな妹に目を向けることなく、視線をガルダウィングから動かさない。



う。

しかしその隙を見逃す者はいない。

サラは、身体中を水で濡らして鈍ったガルダウィングに矢を射掛ける。

一本と言わず何本も何本も連続で放ち続け、そのうちの何本かはガルダウィングの翼や胸に刺さる。

悲鳴を上げ、ガルダウィングは体を捻り矢を回避しようとするが、叩きつけられる雨のせいで周囲が見えず、とても自由に身動きなど取れそうにない。

縮小を続けていた雲が晴れたとき、ガルダウィングの目は怒りに染まっていた。

標的を自分を殺そうとしたサラに変え、ガルダウィングは猛スピードで飛びかかる。

「ギヤアアアアアア！」

無数に矢を浴び、身体は雨に濡れて鈍くなつたとは言え、サラでは到底躲すことの出来ないガルダウィングの攻撃。

サラも体をひねり躲そうとするが、とても間に合いそうにない。

「あたしの妹に、何しようとするのよ！」

サラが狙われるとわかっていたエレンが、即座に手斧を投げつける。

全力で投擲されたそれは側頭部に命中し、サラは体制の崩れたガルダウィングをギリギリで回避する。轟音を鳴らしながら魔鳥は地面へと叩きつけられた。

だが、ガルダウィングは頭部に斧を叩きつけられても、魔物らし

いタフネスですぐに起き上がろうと翼を広げる。そうはさせじとトーマスがロングスピアを振りかざし、ガルダウィングの足を地面に縫い付けた。

悲鳴をあげる巨鳥。バサバサと翼を広げ暴れるが、ユリアンが長剣を振るい身体を何度も切りつける。

空を飛んでいるならまだしも、地上に落ちてしまえばただの巨大な鳥である。

呼吸を落ち着けたハリードは背中に飛び乗り、曲刀を怪鳥の首元に向ける。

「あの世で俺に詫びろ」

断末魔が周囲に響いた。

『ミカエルの宿营地』

モニカの兄であり若き王、ミカエル・アウスバツハ・フォン・ロアー又は、六人の腹心と軍議を進めていた。

突如ミカエルは、何かに気づいたかのように報告書から目を離し、頭を上げた。

「今何か聞こえたか？」

「はあ、私は特に何も聞こえませんでした」

「ふむ……気のせいだな。報告の続きを」

「はっ、魔鳥ガルダウィングの被害は大きく、兵にも不安が広がっております。至急討伐隊の編成を進言します」

「兵の数もギリギリだ。ガルダウィングを相手にすると、今の何十倍も被害が出るだろう。これ以上は減らすわけにはいかん。すまないが今は討伐隊を出す余裕がない」

「はっ……それでは報告は以上です。失礼いたします」

報告を終えた部下が出ていくのを見届け、ミカエルはため息を吐いた。

「ゴドウィンめ、早く反乱を起こせばいいものを……」

今頃あの腹心はどうやって兵達を宥めようか苦心しているだろう。兵の不満は高まっていくばかりだ。申し訳ないと思いつつ、ゴドウィンが全て悪いと責任を擦り付ける。それぐらいしないと王はやっていけない。

「とりあえず報告を。伝令、次はライブラとタウラスを呼べ」

「はっ」

「以上の事から、この付近でアビスゲートがあるかと思われるます。まだ正確な場所は掴めておりませんが、とりあえず学士達の推測による見解を申し上げます」

「うむ」

「まず、ピドナにある古の魔王が猛威をふるったと言われる魔王殿、ジヤングルの奥深くに存在すると言われる火術要塞、西太平洋のどこかに沈んでいると言われる海底宮、そして王国の南東にある常に濃い霧に覆われている魔峰タフタヌーン山。この四点にアビスゲートが存在する可能性が高いとの事です」

ミカエルは組んでいた腕を解き、頭を抑えた。

「頭が痛いな。ピドナはメツサーナ王国の首都でこちらが軍を動かせば、あちらも何事かと軍が動くだろう。せつかく均衡を保っているのに戦争の火種になってしまう」

「火術要塞攻略も難しいかと。現地人ですら浅い情報しか掴めていない深い森ですし、密林での先の見えない戦いで、兵達の疲弊と損失はこれまで以上となるかと」

「海底宮など、あの広い海の中をどうやって探すというのだ。よしんば見つけたとしても海の中から船を襲われたらすぐに沈められるだろう。聖王のように沈まない船を作れと言うのか。それが出来たらさぞかし楽しい航海になるであろうな」

「となると、タフタヌーン山しかないが、問題はあの切り立った岸壁と深い霧ですな。他のところよりかはマシかもしれませんが、それでも物資や装備、人的被害は甚大なものになりそうですな」

ミカエルの言葉を皮切りに部下達が各々の見解を述べていく。ミカエルもいくつか案を考えているが実現には至らないようなモノば

かりである。

それよりも今は目の前の戦に集中すべきだろう。 ミカエルがこの話は終わりと云わんばかりに手を叩く。

「取り敢えず今回の戦が終われば次第また召集をかける。 それまでに皆、いくつか案を考えていくように。 さて、次は」

「申し上げます！」

ミカエルの話を遮り、伝令が駆け込んでくる。 ミカエルの前で  
すぐさま膝をつき、頭を伏せる。

突如息を切らし軍議を中断させた伝令に、部下達は何かと戸惑い  
を露にする。

「何事だ、モンスターが攻め込んできたか？」

ミカエルが伝令に尋ねるが、彼は首を振り、伏せていた頭を上げる。  
る。

「申し上げます、モニカ様がいらっしやいました！」

## 王との謁見

ユリアン達一行は直ぐ様、ミカエルのテントに通された。モニカ以外のメンバーは、天幕にいる君主ミカエルの姿を見るなり、直ぐさま片膝を付き頭を伏せる。

モニカは道中ほとんどの時間を不安そうな顔をしていたが、ミカエルの顔を見ると肩の荷が降りたのか笑顔を見せ、嬉しそうに駆け寄った。

「モニカ、一体どうしたのだ。こんな所までやって来るとは」

冷静な顔を崩さず、ミカエルはモニカに問う。ミカエル自身、久しぶりに妹に会えて心情では喜んでいるが、王として、また大將としてなぜその身を危険に晒し森を抜け、ここに来たのかを先に聞かなければならない。

「お兄さま、大変なのです。ゴドウィン男爵と大臣が反乱を！」

「……そうか」

それを聞いてミカエルは、目を瞑って俯き、数秒考える素振りを見せる。一拍、二拍と呼吸を置き納得したのか、頭を上げ目を開きモニカに礼を述べた。そしてモニカの後ろで膝をつく五人の男女に目を走らせる。

「わざわざお前が知らせに来てくれたのか。ご苦労だった。…

…後ろの者達は？」

「私をシノンの村からここまで護衛をしてくださったのです」

ミカエルは頭を下げるユリアン達を、一人一人の姿を確認し礼を述べた。

「我が妹を助けてくれた事に感謝するぞ、今は遠征中であるから、大した礼は出来ぬが、ロアーヌに戻り次第、十分な恩賞は取らせる」

「ありがとうございます」

代表でトーマスが感謝を述べる。ミカエルはモニカに向き直り言った。

「私はすぐにロアーヌに発ちゴドウィンとは一戦交えねばならん。モニカ、お前と一緒に来るのは危険だ。そうだな……お前達、もう一仕事してもらえぬか？ モニカを北のポドールイまで送り届けてくれ」

それを聞いてユリアンは伏せていた頭を上げた。

「ポドールイ……あのヴァンパイア伯爵の所へですか!？」

「ああ。レオニード伯爵は信用できる。それこそ下手な人間よりもだ。モニカ、それでいいな？」

「お兄様の言いつけならば喜んで」

「モニカ様!？」

ユリアンは魔族に大事な妹を預けるミカエルに驚き、それを疑いもしないモニカに驚いた。血を分けた絆とはこつも強いものなの

だろうか。　ユリアンはそう考えるが、それを黙って聞いていたエレンは違う見解を出していた。

あれは、兄妹としてというのもあるが、それ以上にモニカの主体性の無さからくるものだ。　もし自分が皇帝の立場で妹をレオニード伯爵の元へ行けと命じる立場だったとしたら、サラは全力で拒否していたはずだ。　それを特に反論も無く、言われるがままに行動するという事は、恐らくモニカは自分が国の物であると理解しているのである。

籠の中の鳥、という言葉がエレンの頭に浮かんだ。

「貴様、不敬である！」

控えていた兵士がユリアンに叱責を浴びせる。　許可なく頭を上げていた事に気づき、ユリアンは慌てて頭を下げた。

恐縮するユリアンをミカエルは特に気を悪くした様子もなく、話を続ける。

「モニカが吸血鬼になられては困る。　使えそうなものを支給するゆえ、十分注意してくれ。　では出発の準備をするように」

「はっ」

そう言って、立ち上がったユリアン達は頭を下げ、天幕を出ようとする。

「待て！　……お前、トルネードだな？」

突然ミカエルに呼び止められ、ユリアンはまた何かやってしまったのだろうかと冷や汗を掻くが、ミカエルの声はユリアンに向けら

れたものではなかった。

「俺をそう呼ぶ奴もいるな」

振り返りもせず敬意を払わず発言するハリードに、幾人かの兵士達が殺気立つ。またそれとは別に、ハリードの名を聞き感嘆とする者達も何人かいる。

「これは良い所に来た。トルネードよ、お前は私とローアーマまで来てくれ。モニカの護衛はその四人だけでよい」

「出すものを出してくれたら俺は構わんぜ」

ハリードがミカエルの方を向き、金銭を要求する姿にトーマス達は冷や汗が流れる。

不敬罪って連れてきた人間も罪になるのだろうかと考えるが、ミカエルは気にする様子もなく、ハリードに話を続ける。

「こんな所で貴重な戦力が手に入るとは、世の中何があるかわからんものだな。ローアーマに戻ったらすぐ迎えの者を送る。頼んだぞ」

頭を下げ、ユリアン達は足早にテントを出た。

「もう少し護衛をつけてやったらどうだ？」

ユリアン達がいなくなったのを確認したハリードは、ミカエルに言った。

「予定外なのだ」

「ん？」

「ゴドウィンが父の生前から陰謀を企んでいたのはわかっていた。反乱を起こさせておいて奴らの一味を一気に片付けるはずだったのだが」

「計画通りだったというわけか、恐ろしい男だ。しかし妹がここまでくるのは予想外だったと」

「モニカがこのような大それた行動を起こすとはな。私もまだ甘い。今回の戦は男爵に勝てる最低限の兵しか連れてきていない。そうでなければ奴は反乱を起こさないだろう。これ以上一兵たりとも減らすわけにはいかんだ」

「しかし、妹の身になにかあったらどうする？」

少し考え、ミカエルは言い放った。

「私が死ねば、あれも生きてはいられぬ身よ」

翌朝、ユリアン達はミカエル達と別れ、ポドールイへと旅立った。無事モニカをレオニード伯爵の元へ連れて行ったユリアン達は、ミカエルがゴドウィンの軍勢を打ち破った事を聞き、迎えを待たず直ぐ様ロアーヌに向かった。

謁見に呼ばれ、ミカエルが王として謝辞を述べる後、煌びやかな

衣装に着替えたモニカが一人一人手を取りつつ礼を述べてゆく。  
トーマス、エレン、ハリード、サラと順に続き、最後にユリアン  
の手を握る。

「ユリアン様、有難うございます」

「自分が正しいと思うことをやれって、おやじがいつも……別にそ  
んな……」

照れるユリアンに柔らかく微笑むモニカ。 ゆっくり手を離し、  
今回の影の功労者でもある侍女に礼を言う。

ミカエルが恩賞の事を伝えると、ハリードの厚かましい言葉に皆  
冷や汗を流す。

「まあ、ハリード様ったら」

笑顔を見せるモニカは、楽しい友人達との旅が終わった事に一抹  
の寂しさを感じていた。

「どづしてこうなった」

三日後、シノンの村に戻ったユリアンは、自室で届いた書状を両  
手で握り、何度も書かれている文字を読み直している。 手が震え、  
声は震え、書状の文字以外何も頭に入らない状態だ。

書状にはこう書かれていた。

『ユリアン・ノール。ただちにロアーヌの城に出頭すべし。支度金は付随させたカードに付与されている。ミカエル・アウスバツハ・フォン・ロアーヌ』

まさか、こないだのテントで勝手に顔を上げた件か。それともハリードが不遜な態度取った連帯責任か、いや、モニカ様を危険に合わせたのもまずかったのかも……ユリアンは頭を抱える。

書状には要件も何も書かれておらず、それがまたユリアンの不安を増長させる。

「うわああああ……どうすりゃいいんだー」

「ユリアン、入るぞ　どうした、変な声上げて」

トーマスが扉を開くと、奇声を上げているユリアンの姿が目に入った。痴態を繰り広げるユリアンに、極めて常識的に対応するトーマス。

「トムー、俺、もう駄目かも……」

「落ち着いて話すんだ。　後、取り敢えず鼻をかむんだ」

トーマスの姿を見るなり、ユリアンはダッシュで頼りになる親友の下へ駆け寄る。涙と鼻水を垂らしながら駆け寄る友人に、トーマスは内心相手にしたくないと思いつつ、懐紙を差し出す。

鼻をかんでもグズグズと涙を流し続けるユリアンは、言葉を出すのも難しいのか手に持っていた手紙をトーマスに差し出す。情けない表情をするユリアンを尻目に、トーマスは書状を受け取ると素早く目を通した。

「……なるほど、これは大変な事態だな」

「うんうん、そうだろう。俺縛り首になるのかなあああ」

「はあ？」

トーマスはユリアンが何を勘違いしてるのか理解できなかった。

「ユリアン、お前が馬鹿なのは知っているが、どついう発想で縛り首になるんだ？」

「不敬罪とか連帯責任とか業務上過失とか……」

「ああ……なるほど、そういう事か」

ユリアンがボソボソと話すのを聞き、聡明なトーマスは彼が何を言いたいのか理解した。取り敢えず疑心暗鬼に陥っている友人の不安を取り除いてやろうと、うずくまるユリアンの肩に手を置いた。

「取り敢えず喜べ。お前は死刑にならんだろう」

「なんでそう言い切れるのさ」

「書状が届いた意味を考えろ。わざわざ犯人に、これから捕まりに来て下さいって内容の書状とそのためのお金を送る奴がいるか」

「……いないな、うん」

「それにこの手紙はミカエル様の手書きだ。わざわざ犯罪者にそんな手の込んだ事はしないだろう。おそらくそれなりに重要な内

容なんじゃないのか？」

それを聞き、ユリアンは胸を撫で下ろす。

「そうか、それならいいんだ。でも重要な理由って、なんでまたミカエル様が俺なんかを呼ぶんだ？」

頭を捻って考えても、ユリアンのあまりよろしくない頭脳ではさっぱり思いつかない。

トーマスに尋ねるが、情報が少ないと頭を振った。

「まあ、皇帝陛下の勅命だし行ってみるしかないな。それに、もしかしたらまたモニカ様に会えるかもしれないぞ。結構気に入っているんだろっ？」

「そ、そんな……何となく妹ってあんな感じなのかなって思っただけ」

「妹って事ならサラがいるだろうに。まあ相手は王女様だ。身分違いの恋は辛いぞ」

「ば、馬鹿。俺にはエレンって心に決めた奴が」

トーマスがからかうと、ユリアンは顔を赤くしてそれを否定する。

慌てふためいているユリアンを見ながら、トーマスはポケットに手を入れ、自分に届いた書状を握り締める。書状はミカエルからではなく、ピドナに住む叔父からの召集の手紙。

この日を境に二人の運命は大きく変わる事となる。

武器を持ち戦うユリアン、頭脳を駆使し戦うトーマス。今はまだ未熟な二人は、後世に深く名を残す事となる。

しかしそれはまだまだ先の事。今はまだシノンという開拓の村の一村民でしかない二人は、そんな事を露とも知らず。シノンで見られる兄貴分と弟分のくだらない掛け合いを続ける。

「そういや、サラってかなりトムに懐いてるよな」

「ん、そうか？」

## それぞれの道

翌日、ユリアンはトーマス、エレン、サラと共に馬を飛ばしロアー又に向かった。

トーマスも別件でロアー又に用があるらしく、サラとエレンは便乗して遊びに行くとの事である。

ロアー又に着き宿で馬を預けた一行は、夜に酒場で落ち会う約束をして解散し、ユリアンはその足で城に向かった。

華やかな通りを抜けると、巨大な城がそびえ立っていた。質実剛健を思わせる城は、外部を多少破損しており、現在も職人が忙しそうに修復していた。戦争でもあったのだろうかユリアンは首を捻る。

そうこうしている間に、城門が見えてきた。

城門の前に二人の門番が立っており、そのうち一人に書状を渡す。

「ユリアン・ノールか。書状の刻印は間違いなくミカエル様のものだな……なるほど、入場を許可する」

目つきの鋭い門番にじろじろと見られ、ユリアンの緊張が少しずつ増す。値踏みするように笑顔を浮かべる侍女に連れられ渡り廊下を歩き、何度か曲がったり進んだりを繰り返す。そして、こちらでお待ちくださいと言われ侍女が出て行ったときには、ユリアンの頭は真っ白になっていた。

トムとサラには心配ないって言ってたけど、本当に大丈夫か……？ エレンはあなたこれかもよって笑いながら首を掻く切るジェスチャーしてたしなあ。というか、少しは心配そうな素振りを見せ

てくれよ、エレン……

思い出して、落ち込むユリアン。しかし、夜にはエレンに会える事を思い出し、だらしなく顔を緩ませる。

生きて帰れたら、またアタックを続けようと拳を握り決意を新たにする。

「くすくすくす……」

ユリアンが次のアプローチをどうするか考え出したところで、どこからか声が聞こえた。笑いを堪えようとしているが、どうにも我慢できずに漏れてしまったようである。それにしてもどこかで聞いた事があるようなと思いつながら、ユリアンは笑い声がする方向に向かってみる。

笑い声は大きなカーテンの後ろからする様で、近づくと薄っすらと人影が浮かんで見える。

思い切ってカーテンを引くと、そこには思いがけない人物がいた。

「も、モニカ様!？」

「くすくす……あ、見つかってしまいました」

優美なドレスを身に纏ったモニカは、楽しそうに笑いながら悪戯が見つかったときの様な茶目っ気のある表情をした。

ユリアンは一瞬跪こうと足を曲げたが、すぐに止め、頭を掻いた。上下の身分を排し、共に旅をした仲間として相手をしてもらえて、ひどくご満悦だ。

「笑ったりしてごめんなさい。ユリアンが笑ったり落ち込んだり

百面相している顔が面白くて……」

「い、いや。 まあいろいろありまして」

照れくさそうにするユリアンに、モニカは嬉しそうな表情を見せる。

「モニカ様はいつからそこに？」

「つい先ほどですわ。 衛兵にユリアン様が来たら知らせる様にと伝えて、侍女に少しだけ時間稼ぎして貰って、先回りしてカーテンの後ろに隠れたんです」

これなら大きくて隠れ場所としては十分でしょうと、モニカはちよこんと可愛らしくカーテンの裾を持ち上げた。 さらさらと豪華だが決して華美ではないカーテンが流れる。

淑やかに笑顔を見せるモニカは、旅をしていた時とは全く別人に見える。

「それにしても、モニカ様も何か用事があったのでは？」

「いえ、昔は勉強やフルートの演奏の練習、社交ダンス等もしていましたが、今はこれと言って特に何もしてないのです。 毎日のお世話として、植物に水を差し上げるぐらいですわ」

「そうですか、王宮の暮らしてのは良いものですね。 皮肉とかじゃなくて、純粹に働かなくてもいいってのは羨ましい」

ユリアンがそう言うと、モニカはふっと顔を伏せた。

「私は、ユリアン様の方が、羨ましいです」

モニカはユリアンに聞こえないほど小さな声で呟いた。

それから暫くの間、ユリアンとモニカは侍女が入れてくれたお茶を楽しみつつ、会話を楽しむ。

三十分後、モニカがミカエルに呼ばれ退室したが、暫くの間モニカが話し相手をつとめてくれたお陰で、いつの間にか緊張がすっかりほぐれた様だ。まあ、一国の王女が接待役をしてくれるなど、普通はありえない光景なのだが。

のんびりと紅茶を楽しむユリアン。ほどなくしてミカエルへの面会の準備が整ったと、侍女に案内され廊下を進む。

途中、廊下でハリードに会うが、彼はまあ頑張れと言って、軽くユリアンの肩を叩き去っていった。

扉の前の二人の衛兵に軽く頭を下げる。

「次、ユリアン・ノール。入れ」

伝令がユリアンを呼び、謁見の間に入るように促す。

ユリアンが王室に入ると、玉座にミカエルが座っており、傍にモニカが立っていた。目元が赤くなっているのは気のせいだろうか。

「お久しぶりです。 こんにちは」

「ああ、取り敢えず要件を言っぞ。 今日来てもらったのは、お前に頼みがあるからだ。 今度新しくモニカの護衛部隊、プリンセスガードを作るのだが、それをお前にも参加してもらいたい」

ユリアンは絶句した。それはただの一村民が兵士になるという事である。

ミカエルは実力主義であり、一市民が兵に取り立てられる事も何度かあった。しかしそれには、厳しい訓練を重ね、ミカエルの厳しい目を潜り抜け、実力を認められた者だけである。ユリアンもそれなりに腕に自信はあるが、それでも騎士になれるほどの実力を持っているとは自惚れていない。

それが、ただの一兵卒ではなく、王女側近の護衛部隊。あまりにも信じられない出世である。

「その、どうして俺……私なんかに？」

「モニカとハリードの意見だ。おまえはガルダウイングを倒すほどの実力の持ち主だと聞いた」

嵌められたとユリアンは直感する。大方ハリードがミカエル様に護衛部隊に入るように頼まれて、それを面倒だから断ったのだろう。かと言って、面倒だからと理由もなく断るとミカエル様のメソツが潰れるから、適当に俺がガルダウイングを倒したと手柄を押し付けて、それを口実にしたんだ……ユリアンは開いた口がふさがらなかった。

とりあえず、自分の実力の無さを理由に断る事にする。

「俺には、無理です」

「謙遜するな。ハリードが手放しに賞賛するのはとても珍しい事だぞ。私の部下達もそれなりに実力はあるが、ほとんどの者がハリードの目にかかることはなかったほどだ。ユリアンほどの実力がないと護衛にならんと说っていた。まあ周囲の者は皆、悔しそ

うな顔をしていたが」

やっぱりかよおおおとユリアンは心の中で突っ込むが、時すでに遅し。しかも何気にユリアンは周囲から妬みとやっかみを受ける立場になっている。

「ユリアン様、私からもお願いします。どうか私の護衛部隊に入ってくださいませんか」

「い、いえ。あの、その、モニカ様？」

「ユリアン様なら、きつと立派にやっていると、私を守ってくださいと信じています！」

壇上から降りてきたモニカは、ユリアンの手を握ると必死に懇願する。ミカエルはその姿を見て眉を潜めるが、あえて何も言わなかった。

ユリアンは当初困惑したがモニカの必死な表情を見て、ある事に気付く。先ほど壇上にいたモニカの目元が赤いのは気のせいだと思っただが、近くで見ると激しく泣いたのか涙の跡が残っている。

「モニカ様、泣いて……？」

「つい先ほど、モニカの最も信頼していた侍女が、国を出ると言って去っていった。昔から姉の様に慕っていた者だったからな。

私は先の戦争で暫く政務に専念する必要がある。その間、モニカは一人きりだ。モニカの心を慰める相手が必要なのだ」

ユリアンの指摘に、ミカエルが答えた。

「ユリアン・ノール。これで頼むのは最後だ。プリンセスガードへの入隊を承諾してくれるか？」

ユリアンは肩を震わせるモニカの姿と、壇上のミカエルを交互に見て、最後に、お願いしますと首を縦に振ったのだった。

「お兄様、ありがとうございます」

ユリアンが去って行った後、モニカは傍にいるミカエルに礼を言った。ミカエルは面倒くさそうにモニカの顔を見た。

「本当は気づいていたんでしょう？ ガルダウィングを倒したのがユリアン様じゃないって」

「当たり前だ。まだあれは尻の青いガキだ。精鋭たちが束になって戦っても勝てんかったガルダウィングを、あいつ程度が倒せるわけがない。大方ハリードが断る口実にあいつを身代わりにしたんだろう」

「でも、ユリアン様は間違いなく私を守ってくださいました。あの方ならこれからも私を守ってくれると信じています」

「妙にあいつの肩を持つな」

「まあ、そんな事ないですわ」

「そう言えば、ユリアンは一家臣となったのだ。もうユリアン様

と呼ぶな」

「はい、わかりましたわ」

その日の夜。

「へえ、あんたがモニカ様の護衛部隊にねえ……」

エレンがビールを片手に胡散臭そうに言った。

「俺も驚いてるよ」

「でも、大丈夫なの？ バレたら怒られるだけじゃすまないよ？」

シチューを食べながら言うユリアンに、サラは心配そうに言った。

「恐らく大丈夫だろう。 とうか、恐らくミカエル様はユリアンがガルダウイングを倒したわけじゃないって気づいてるよ」

「ええ、それじゃユリアンはモニカ様の話し相手の為だけに兵士にさせられたって事？」

「まあそうなるだろう。 後、ユリアンの話だけじゃ推測しにくい  
が、もしかしたらミカエル様は直接ユリアンに会うまでは、家臣に  
する気はなかったのかもしれない」

「ええ!？」

トーマスの言葉にユリアン、サラ、エレンは一様に驚いた。

「恐らくミカエル様はハリードが家臣になる事を断った時点で、メ  
ンツの事を考えたんだろう。いくら流れ者だからと言って納得す  
る理由なく断られるのを家臣団は良しとしないだろう。だからハ  
リードは最もモニカ様と接していたユリアンを自分の代わりにした」

「俺もそう思った」

「ちゃんと考えたんだな、偉いぞ。それでユリアンが謁見する前  
なんだが、お気に入り侍女が国を出たと言ったな。恐らくだが、  
何らかの理由でミカエル様はその侍女を解雇したんだ。冷徹とも  
噂されるミカエル様だが、さすがに血を分けあったたった一人の妹  
の心を無視する事も出来なかったんだろう。だからユリアンの入  
隊を許可した」

「取り敢えず聞いてみて、本人が実力不足って言って断られたら、  
あっさりこの話は終わらせるつもりだったのね。もしモニカ様の  
件がなかった場合は、何も考えず入隊するなんて言ったら、何かと  
理由をつけてでクビにしてたわけね」

「まあそうだろうな」

「ま、まあとにかく。頑張ってみるよ、俺。確かに流された感  
じがあるけど、寂しそうなお姫様を一人きりのまま放って置くこと  
なんて出来ないしな。だから暫くはシノンに帰れない」

「ああ、ユリアンならそう言つと思つてたさ、頑張れよ。それじやこの話はこれで終わりだ」

トーマスがビールを一口飲み、この話を締めくくった。

「さて、それじゃ次は俺の話だ」

トーマスに注目が集まる。トーマスはビールを置き、ポケットから折りたたまれた書状を取り出した。

「叔父からの手紙だ。俺は近々ピドナに発つことにする」

「え、どうして?」

「詳しい内容が書かれていないが、仕事を手伝つて欲しいらしい。一通りなんでもこなせる様になって家訓もあるし、そちらに向かうつて返事も出した。どれぐらい日数がかかるかは分からないけどな」

「……私も行く」

「サラ!?!」

サラの突拍子もない言葉に、ユリアンは喉に食事が詰まったのか咽せかえり、エレンは椅子を跳ね飛ばしテーブルに身を乗り出し、トーマスは目を大きく開く。

「何馬鹿な事言ってるの、あんたは!」

過保護なエレンが妹を叱責する。

「サラ、あんたまだ十六よ。 気弱で世間知らずで麦刈りと製粉ぐらいしかした事のない小娘がいつちよまえに社会に出るわけ？ なにも後ろ盾がなくて、裕福じゃないけど生きていける程度の収入はある家を捨てて、それでも出ていこうっての！？」

「私はもう子どもじゃない！ お姉ちゃんの後ろに隠れるのはもう嫌なの！ 変わりたいの！ 私は ！」

エレンが声を荒げてサラを非難するが、サラも負けずに言い返す。 大声を上げてエレンに逆らうサラを見るのはユリアンもトーマスも、エレン自身も初めての経験だった。

「けほつ、落ち着けよ。 二人とも、ここは食堂だ」

「エレン、わかってやれよ。 サラはもう大人だ。 自分の道は自分で決めれる年だ」

「〜勝手にしなさい！」

トーマスの援護射撃を受け、エレンは肩を震わせて店を出ていった。

ユリアンはサラとトーマスを交互に見やるが、気持ち固めエレンを追う。 トーマスはサラの頭を優しく撫でていた。

「エレン！」

「うっさい、ついて来んな！」

エレンが全力で逃げる。　ユリアンは離されまいと必死で追いかける。

体力自慢の二人はなかなか距離が縮まらないが、それでも男性と女性の持久力の違いか、徐々に距離が狭まってゆく。

「逃げんな！」

「逃げてない！　逃げてるのはサラの方よ！」

ユリアンがあと一步のところまで手を伸ばし、エレンの腕を掴んだ。エレンは身を捻り暴れるが、ユリアンが両腕を抑え、エレンを宥めようとする。

エレンが抵抗しないユリアンに声を荒げ言う。

「あんたは、サラが心配じゃないの！？」

「心配だが大丈夫だと信じてる。　大切な妹分だからな。　エレンこそサラを信用してないのか？」

「あんた以上に大切に思ってる妹よ、だから心配してるんじゃない！」

「エレン、お前のしないといけないことは信頼する事だ。　心配する事じゃない。　それにトムもいるだろう？　お前はあの優秀で真面目なトムを信頼してないのか？」

「……信頼してるわよ」

「だろう？ 一人きりで行くわけじゃないんだから、きっと大丈夫だ」

「……」

ユリアンの説得に、徐々にエレンの興奮が静まっていく。しかしまだ何か言いたい事があるのか、エレンは肩を震わせている。

「あんたは、村を出ていく。トムも、サラも……ピドナに行くし、私だけ何も変わらず一人ぼっちじゃない。」

ユリアンから目を逸らし、エレンは絞り出すように言った。

「エレン……」

かける言葉が見つからず、ユリアンは立ち尽くす。

エレンは言いたいことを言って落ち着いたのか、一度深呼吸をし、ユリアンを見た。

「悪かったわよ、ただの嫉妬よ。みんなこれからもずっと一緒にわけないのに、勝手に悩んで、妹に当たって……最悪ね、私」

「そんな事はないさ、俺だってこんな事がなかったら、ずっとみんな一緒だと思ってたしな。エレンが俺と同じ立場だったら、嫉妬がないって言い切れないだろうし」

「あんた、結構優しいのね」

「今頃気づいたのか？」

エレンが茶化すと、ユリアンは戯ける。そして顔を見合わせひとしきり二人して笑うと、ユリアンとエレンは食堂の方に視線を向け、どちらともなく歩き出した。

数日後、ユリアン、トーマス、エレン、サラはロアーヌで別れた。ユリアンはモニカの身と心を守るプリンセスガードとして、トーマスは自分の可能性を確かめる為、サラは外の世界を知りたいが為、そしてエレンはこれからの自分の道を見つける為に旅に出る。それぞれが違う道を歩くという事で、四人は歩き出す。

四人が再開するのは暫く後。

複雑に曲がりくねり、幾度か交差してはすぐ分かれる道に立つ四人は、これから数奇な運命に巻き込まれていく。

## プリンセスガード

「おらああああ、腕立てまだ終わらんのか、新入りiiiiiiii  
!」

「ひiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiii!」

エレン、サラ、トム、元気でやってるか。毎日大変だけど、優しい先輩共に囲まれて俺は元気です。

「さて、ユリアン・ノール。ここがこれからお前が生活する場だ。心身共に逞しく鍛え上げ、ミカエル様とモニカ様をお守りするのだ」

「はい!」

「覚える事はたくさんあるぞ! 炊事は交替制、掃除や洗濯も自分でする必要があります。だが、皆が仲間で兄弟だ。誰一人お前を見捨てず、必ずや立派なソルジャーに育ててくれるだろう!」

「ありがとうございます!」

ユリアンは上官であるタウラス直々に連れられ、王城内を案内してもらっていた。入隊初日、当初は緊張していたが、タウラスの

気安い態度に絆され、自然と緊張も緩まる。

タウラスも威勢の良いユリアンに好印象を抱いていた。

「あつ、ユリアンさ……ユリアン！」

「あれ、モニカ様」

「も、モニカ様！？」

兵士達の憧れの的、高嶺の花であるモニカと親しく会話をするユリアンの姿を見るまでは。

「くらああああああ、新入りiiiiiiii！早くその積んであるジャガイモの皮剥けやああああああ！」

「はiiiiiiiiiiii！」

「こらああああああああああああああ、新入りiiiiiiii！まだ掃除終わんねえのかああああああああああ！」

「すみませええええええん！」

「うらああああああああああああああああ、新入りiiiiiiiiiiiiiiiiiiii！走れ走れ、もっと速くだあああああああああああ  
あああ！」



男ははつきりとそう宣言するユリアンに苦笑する。

「お前もよくやるよ。　そりゃモニカ様にあれだけ好かれていりゃ当然か」

「まあそれなりに好かれてるとは思いますが」

「あれのどこがそれなりだ。　あれは滅茶苦茶好かれてるって言うんだよ……」

美形の男が小声で突っ込む。　この男も、端正な顔で常に穏やかな微笑を浮かべるモニカに憧れを抱いている一人で、入団当初、幾度も場内でモニカの姿を探した事があった。　別にモニカとどうこうなれるとは思ってはいないが、それでも結ばれる事を何度か夢想した事はある。

それを先の戦争のごたごたで偶々同行したこの男は、幸運にも姫の信頼を勝ち得、そして今に至る、と。

理解は出来たが、納得はできなかった男は情念を滾らせる。

こいつは姫が暇さえあればあちこち場内を歩き回ってるのを知っているか。

以前はミカエル様の話しかしてこなかったのに、いつの間にかお前の話題を中心にするようになった事に気付いているのか。

お前が剣の修行をしている間、モニカ様も同じぐらいの時間剣術の修行をしている事を理解しているのか。

姫がお茶を誘った時に、それをお前に受けて貰えるたびに花が開くような笑顔を見せている事がわかっているのか。

まああえて目の前の緩んだ顔をして旨そうに飯をかつ食らってる

男を喜ばせてやる必要はない。

「正直お前の事は嫌いだが、まあ認めないほど狭量じゃない」

「はあ、まあ他の隊員からも目の敵にされてますし、今更ですが」

「だから、これは妬みでも優しさでもないが、あえて言うておく。

お前がモニカ様と結ばれる事はないぞ」

「は？」

なぜ自分がモニカと結ばれる云々の話になっているのだろうとユリアンは思った。仲の良い主従として付き合っているとはいえ、他に好きな人のいるユリアンは、モニカに対して恋愛感情は特にない。しかしそれを知らない男は、結婚出来ないと知りショックを受けているのだと勘違いをしたまま話しを続ける。

「お前は王族でも貴族でもなく、ただの平民だ。平民が王族と結婚するなんて御伽噺だけの話だ。どれだけ努力しても、出世しても、名声を得ようと、お前はモニカ様と結ばれる事はない。これは、生まれ持った時に決まっている仕方の無い事なんだ」

「ええ。そりゃまあ、どうにもならない事ってのはあるでしょうけど」

困惑するユリアンを尻目に、男は現実を叩きつけるべく熱く語る。

「今もモニカ様にはひっきり無しに結婚の申し込みが寄せられている。ミカエル様がそれを選別しては断っているが、それも時間の問題だ。そろそろモニカ様もどこか大国に嫁ぐ事になるだろうよ。

ロアーヌの華は他国の誰とも知れない物になってしまっただ」

「あ、もう時間なんで行きますね。 モニカ様と出掛ける約束しますので」

「聞けよ、おい……行っちゃった。 そっぴやツヴァイクの使者が近いうちに来るとか言ってたが、今回で何回目の結婚の申し込みだっけか。 あの新人りはモニカ様とのんびりいちゃいちゃするのに、俺はまだ見つかってないゴドウインの搜索か。 ちくしょー」

さっさと出て行ったユリアンを恨めしく思いながら男は毒づいて、食堂を出て行った。

「ユリアン、お待たせしました」

「いえいえ、今日はよろしくお願いします。 モニカ様」

ユリアンは普段着のドレスから外出用の軽装に着替えたモニカを出迎える。 腰にはフルーレを携えているが、あの旅以降、三度外に出しているが使用される事はなかった。

モニカを後ろに乗せ、馬を走るユリアン。 城外に久しぶりに外に出たモニカは、あちこちを見渡しては楽しそうに笑う。

「それにしてもモニカ様と出かけるのも久しぶりですね」

「そうですね、最近は物騒だからとお兄様が許可をくれなくて。説得して二時間だけ許可をくれたんです」

「なるほど、それじゃ今日はあまり遠くには行けませんね」

残念そうに言うユリアン。今日は一日護衛の名目でモニカとのんびりするつもりだったのだ。毎日先輩たちのしごきを受けているので、これぐらいの役得はあってもいいだろうと常日頃から考えている。

モニカも二時間は短いと思ってたが、外に行けないよりかはマシだと考え兄の言葉に素直に従った。

「はい、ですから今日はユリアンがこの間見つけた川原まで連れて行って下さい」

「あそこならそれほど遠くないですし、それじゃ今日はそこで日光浴でもしましょうか」

モニカが嬉しそうに頷くと、ユリアンは時間を無駄にできないとばかりに馬の速度を上げた。

「ユリアンは本を読むの？」

「いえ、俺……私はそういうのは苦手です」

「フフッ」

川原について二時間後、のんびりと日向ぼっこを楽しんだ二人は、ロアー又に戻るうと立ち上がる。さあ行きましょうとばかりに馬の傍に寄ったモニカは、気まずそうに頭を掻くユリアンに気付く。

「あ、モニカ様。　少しだけ外します」

「はい、どうしました？」

「いえ、ちょっと……すぐ戻ります！」

さすがに皇女の前で用を足しにいくと言うわけにはいかず、ユリアンは不思議そうな顔をするモニカを放って、急いで近くの林に入っていく。

キョトンとした顔で、ユリアンを見送ったモニカは、もう少しだけのんびり出来ると思いきや座りなおす。

「ぼかぼか」

何となく頭を過ぎった言葉を口に出すモニカ。  
その頭上から、突如巨大な鳥が襲いかかる。

「えっ、きゃー！」

小剣を抜刀する暇もなく、モニカは背中を掴まれ連れ去られてしまう。

「も、モニカ様！」

モニカの危機に気づいたユリアンは、一瞬でも目を離した事を悔やみ必死で馬を走らせる。　しかし障害物をもともしない鳥は、

悠々と飛び去り、真っ直ぐ山の小さな洞窟に入っていた。

「……………うーん」

モニカが目を覚ましたとき、周囲は暗闇に包まれていた。僅かな時が経ち徐々に目は慣れてきたモニカは、ここが岸壁で囲まれた洞窟だと気づいた。

「目を覚ましたか？ モニカ」

突然背後から声をかけられ、慌てて振り向く。そこには三十をいくつか越したであろう、目つきの鋭い痩せた男がいた。

「えっ……………男爵!？」

「ふん、逃げようと思うなよ。こここのモンスターの餌食になるだけだぞ。先ほどもお前を運んだ私の愛鳥が、こここのモンスター共の胃袋に収まったとこだ」

男爵と呼ばれた男、ゴドウィンは忌々しそうに言った。

「本当にしゃくに触る奴だよ、ミカエルも、お前も、そしてお前の父フランツも。私の邪魔ばかりしやがって。私が王となれば、もっとロアーヌをもっと強大に、大きく出来るというのに」

「父も兄も平和を目指しております。それに貴方のお父様は父の右腕だったじゃありませんか？」

「はっ、貴様の父がロアーヌの領土拡大の為に何人も謀殺した事を私が知らんと思っっているのか」

「そんな……嘘です！ 父がそんな事をするわけがありません！」

その言葉をモニカは声を荒げ否定する。

「世間知らずで甘ったれなお姫様の言葉だな。貴様の兄もフランスに負けず劣らず強烈な野心を秘めている。ロアーヌを拡大するために手段を選ばず、平気で人を犠牲にするだろう。いつかお前も使い捨てられるかもしれんぞ？」

モニカを鼻で笑いながら、ゴドウィンは言った。

困惑するモニカは、自分が正しいのかゴドウィンが正しいのか判断がつかなかった。父も兄も自分を城で好きにさせていたが、考えてみると自分は二人の事は何も知らない。二人は優しくしたが、政治の話になると険しい顔をして、決して自分が口出しすること許しなかった。

しかし、それでもロアーヌの民の生活を守る為に、深夜まで政務に向き合う兄を疑いたくはなかった。モニカは伏せていた顔を上げ、ゴドウィンに呼びかける。

「男爵、裁きを受けて下さい。あなたは私達兄妹の数少ない血縁の方。きつとお兄さまも悪いようにはしませんわ」

「ふん、モニカよ。聖王のような言葉だな。だが、私がフランスを殺したと知っても同じ言葉を言えるかな？」

その言葉にモニカは悲しげに目を伏せる。その噂をモニカは聞いたことがあった。

フランツはゴドウィンに毒殺されたと、城内でまことしやかに流れていたのだ。しかし証拠が見つからず、流言を流したとされる者は、いつの間にか姿を消していた。

フランツは落ち込むモニカを見てにやにやと笑っていたが、遠くから低い唸り声が響いている事に気付いた。それは足音と共に徐々に近づいてくる。

「さて、話は終わりだ。俺はさっさと逃げさせてもらうが、お前にはここで恐怖と地獄を味わってもらおう。このモンスター共に怯えながら、無残に食い殺されるがいい。お前のその腰に挿している小剣一本でどこまで頑張れるかな？」

ゴドウィンは素早く逃げ出す。遅れてモニカも追いかけるが洞窟は暗く反響し、また道が入り組んでいるせいもありゴドウィンがどこを通ったのか全くわからない。

「グルルル……」

手探りで出口を探すモニカの背後を、巨大な影が迫る。

「フシュー……」

「!？」

振り向いたモニカが見た者は、自分の身長を軽く凌駕する巨大な魔物だった。

醜悪な顔に耳まで裂けた口から覗く鋭い牙、巨大な角に小さな蝙



るのにもモニカは気づく余地がなかった。

「ユリアン、どこですか！」

モニカはユリアンが自分を追って来てくれていると信じ、彼の名を叫ぶ。

横幅の狭い通路を抜けるが、悪鬼は道を無理やり押し通ってくる。鋭い爪がモニカの髪が数本裂いた。

天井の低い鍾乳石が大量に垂れている道を通るが、悪鬼はそれを粉碎して追いかけてくる。長い角がモニカの腕を打ち据えた。

高低差の激しい道を走るが、悪鬼はそれをもともせず突き進んでくる。モニカの背中を拳が襲った。

「かぶっ……」

モニカは殴られた衝撃で、激しく転がった。慣性の法則が働き、殴られた痛みはそれほどでもないが、立ち上がるうにも足がもつれる。

悪鬼は今度こそ逃げ切れまいであろうと確信して、不気味に笑いモニカに近づく。

モニカは戦いを避けられないと思い武器を構えるが、手は震え、なかなか言う事を聞かない。

小剣を振るうが、踏み込みも正確さも何もかも万全とは程遠い状態である。悪鬼の身体に全く傷をつける事も出来ず、武器ごと弾かれるが、それでもなお戦意を失わず、モニカは目の前の巨大な鬼を睨みつける。

悪鬼は、今度こそ外さない様にその巨体ごとぶつかろうと足に力を込めた。

「ユリアン……」

避けようとするが足に力が入らず、地面にへたりこむ。 モニカは今度こそ死を覚悟した。

音を立てて迫り来る巨体を見て、自分は押しつぶされるのだろうと思った。

「モニカ様、ご無事ですか!？」

信じていた彼が、ユリアンが、自分だけの騎士が現れるまでは。

## 脱出

「う、おおおおおお」

モニカと悪鬼の間に割り込んだユリアンは、ブロードソードを握る両手に力を込め、悪鬼の胴体に打ち込む。

「グオオオオオオオオオオオ」

「くそつ、硬い！」

悪鬼は剣で切られた影響で身体を流され、モニカのすぐ傍を通り抜ける。身体から夥しい血が流れ、咆哮を上げる悪鬼。

ユリアンはモニカに駆け寄り、視線を魔物から離さずに、モニカを背後に回す。

「モニカ様、申し訳ありません。俺が目を離したばかりに……」

「いいえ、来てくれると信じてました。ユリアン」

モニカの双眸から一筋の涙が流れる。すぐさまユリアンに気付かれぬように乱暴に涙を拭うモニカ。

「取り敢えず、さっさとこいつを倒して帰りましょう。おそろくミカエル様が心配して捜索隊を出しているはずです」

剣を構えユリアンは前傾した姿勢をとる。モニカも待ちかねたユリアンを見て気力が湧いてきたのか、息を整え小剣を構える。

悪鬼は鋭い爪でユリアンを襲うが、慎重に受け流していく。モニカは隙を見て何度か悪鬼の胴体に突きを放つが、分厚い筋肉で覆われた身体は、モニカの刺突を通さない。

無尽蔵とも言える悪鬼のスタミナを前に、ユリアンとモニカは徐々に劣勢に立たされていく。

「くっ、この！」

悪鬼の拳がユリアンの顔面を狙う。首を逸らし攻撃を回避するが、悪鬼は続け様剛毛で覆われた太い足で蹴りを繰り返してくる為なかなか攻撃に転じる事が出来ない。

モニカも、ユリアンの切り裂いた部位を狙ったら少々はダメージを与える事が出来るが、

敵も動き回っているので狙いを付けることが難しい。

ユリアンの斬撃ならダメージは入るが、モニカの身を危険に晒す事になる。かと云ってモニカが攻撃に回るとダメージが通りにくい。ジリ貧だとユリアンは舌打ちした。

「くそっ、ほんの少し時間があれば何とか出来るのに、こいつ全然止まりやがらねえ！」

「動きを止めればいいのですか？」

「ええ、でもちよっと難しくくて　うわっと」

振り回される腕を間髪避けるユリアン。モニカは服の中から水晶のついた首飾りを取り出す。

それは、今は亡き母のくれたモニカの思い出の詰まった品だった。

「ユリアン、これから私が少しだけ隙を作ります……ですから、止

めをお願いします」

「危険です、モニカ様！ 絶対ダメです！」

「心配いりません。 後ろから石を投げつけるだけですから。 合  
図したらお願いします」

「それぐらい、じゃこいつは止まりません、よっ！」

「大丈夫です、信じてください」

モニカはそう言ってペンダントを握り締める。 心の中で母に謝り、ユリアンが悪鬼の攻撃を受け止めた瞬間、モニカはユリアンの脇から飛び出す。

「えっ、モニカ様！」

「ユリアン、目を閉じてください！ 精霊石よ、光を放て！」

突然隣から飛び出したモニカに驚くが、言われたとおり慌てて目を閉じるユリアン。 手の中の水晶から目が眩むほど強烈な光が溢れ、それを間近で受けた悪鬼の眼を焼く。

「ぎゃああああああああ」

悲鳴を上げ、目を抑えのたうちまわる悪鬼。 辺りが見えず出鱈目に拳を振るい洞窟を破壊する。

「ユリアン、今です！」

輝きを失い黒い石へと変わった精霊石を握り締め、モニカは叫んだ。ユリアンは目を開くと、未だ悶える悪鬼を睨みつける。心を落ち着かせ、剣を垂直に真横に構え、

「ふっ！」

両腕に渾身の力を込めて、一息で振り切る。

飛水断ちと呼ばれるそれは、恐るべき耐久力を誇る悪鬼の身体を真っ直ぐ、横へと分断した。

上下に分かれ崩れ落ちる悪鬼を見て、ユリアンとモニカはやっと戦闘が終わったと感じた。荒い息を吐く二人は、もう立てないばかりに床にへたり込む。

「はああああ、終わったあ」

「疲れましたわ……」

ユリアンは深呼吸をして息を整えると、未だ疲労感の濃いモニカに向き合う。そしておもむろに土下座した。

「ゆ、ユリアン？」

「モニカ様、本当にすみませんでした！ 護衛としてお傍にいる必要があるのにも関わらず、その傍を離れモニカ様を危険な目に合わせてしまいました。このお詫びは如何ようにも致します」

「いえ、貴方は私を守ってくださいました。助けに来てくださったじゃありませんか」

「本当に運が良かっただけです。それに、もう少し遅れていたらモニカ様は間違いないくこの世の者じゃありませんでしたし……」

「今、五体満足に生きている。それだけで十分じゃないですか」

話は終わりとばかりにモニカは立ち上がる。それを見て、いつまでもユリアンも地面に膝をつけているわけにもいかず立ち上がる。激しい疲労感が二人を襲うが、いつまでもこうしてはいられない。出口を探そうと力の入らない足を引き摺り二人は歩き始めるが、背後から声かけられる。

「残念だが、まだ終わってないぞ」

「誰だ!？」

「男爵……」

突然声がかけると、倒れ伏す悪鬼の傍にゴドウィンがいた。

「まさか悪鬼を倒すとはな。こいつは悪魔の中では下位で、おつむはそれほど良くないがその有り余る力とタフネスは中位に届く。それをたった二人で倒せたのは褒めてやる……が、お前達はもう終わりだ」

ゴドウィンの背後から武器を持った三人の男が現れる。

男たちは好色そうにモニカの身体に目を這わす。その視線にモニカは身震いし、ユリアンは不安そうなモニカを背に隠す。

「くくっ、さて今度はお姫様を守れるといいな？ 騎士さんよ」

じりじりと近づく男たちにユリアンは剣を構えるが、一度力が抜けた身体は重く、剣先は細かく揺れている。ゴドウィンは、ユリアン達がやられるのも時間の問題だと思い、二つに分かれた悪鬼に目を落とす。

そして、悪鬼の顔を何度も踏みつける。

「この役立たずめ。 貴様が簡単にやられたせいで、この野盗共に無駄金を使わなければならなくなってしまったじゃないか」

悪鬼の顔に足を乗せ、つばを吐きかけるゴドウィン。 その時、悪鬼の眼がゴドウィンの視線と重なった気がした。

「え……ひいひいひい!？」

悪鬼の巨大な手がゴドウィンの足を掴む。 悲鳴を上げ恐怖に顔を歪めながら、ゴドウィンは足から手を振り払おうとするが、悪鬼はそのまま足を握りつぶす。 鈍い音が洞窟に響いた。

異変に気付いた男達が振り返って見た物は、今まさに鬼に首と肩を掴まれ苦悶の表情をあげるゴドウィンの姿だった。

「ぐ、ぐ……」

ゴドウィンはこれ以上ないほど目を開いて、身体を引き裂かれ絶命した。

「ひいい、あいつまだ生きてやがる！」

「逃げるぞ！ あの野郎も死にやがったしもう金になんねえ」

ゴドウインの壮絶な死に様を見せられた男たちは、動けないユリアン達を尻目に我先に逃げ出す。なおもゴドウインを地面に叩きつけていたぶり続ける悪鬼は、元の形状がわからなくなったモノを潰すのにも飽きたのか、執着を見せずに投げ捨てる。

そして辺りを見渡し、その視線がユリアン達の姿を捉えた。

「走れますか、モニカ様？」

「はい、ユリアン」

「では、逃げましょう！」

ユリアンは悪鬼から目を逸らさず、モニカに小声で囁く。諾を返すモニカの手を取り、反転して全力で逃げ出す。

悪鬼も追いかけてよとすると、足もない状態ではそれもままならない。手元にあった石やゴドウインの身体を投げつけ、咆哮を上げ暴れる。

「きゃっ」

モニカの傍を拳大の岩石が通り抜け、小さく悲鳴を上げる。重ねられた手に力を込めるモニカを、大丈夫だと言わんばかりに微笑み握り返すユリアン。モニカはこんな状況なのに落ち着くと同時に、自分の顔が赤くなるのを感じた。

悪鬼は自分をコケにした者を許さないとばかりに、何度も何度も石や岩を投げつけるが、下半身がないのでバランスが取れず、なかなか目標に当たらない。

手元に投げつける物が無くなると、壁を破壊し砕けた岩を武器とし、また投石する。悪鬼の太い腕から繰り出される剛速球は、石柱や壁を容易く破壊にする。無理な破壊を続ける悪魔は、洞窟が悲鳴をあげている事にも気付かない。

そしてついに耐久力が限界を超え、落盤を起きて洞窟は崩壊した。

ユリアンが気が付くと、周囲は暗闇に包まれていた。先ほどまでモニカと手を繋いでいたが、今はどこにもその姿は見当たらない。ユリアンは声を上げモニカを探す。

「モニカ様、モニカ様！」

「ここです、ユリアン」

「どこですか！」

「ここです、わかりますか？」

慌てて声がる方に向かうと、小さな柔らかいものにぶつかった。モニカの小さな悲鳴にユリアンは驚いて尻餅をついてしまう。

「いてて……すみません、大丈夫ですか？」

「ええ、平気です。真つ暗ね」

お互いの表情を確認できず、辺りは沈黙に包まれている。ユリアンとモニカは今は救助を待つしかないと思い、地面に座り込む。しかしこの何も見えない場所で、無言の空白は耐え難い。モニカは意を決して言った。

「ユリアン、いますよね？」

「はい、ここにいます」

「手を、握ってください。不安なのです」

モニカは暗闇に手を伸ばす。ユリアンも暗闇の中を腕を伸ばし、モニカの手が触れると優しく握る。暖かく血の通った手が、二人の心を優しく包んでいく。

「ユリアン、ごめんなさい。私のわがままのせいで、あなたまでこんなところに閉じ込められてしまって」

モニカの落ち込んだ声が聞こえる。兄からはゴドウインの動きが気になるから駄目だと言われ、その言葉に素直に従っていればこんな事にならなかつた。表情は見えないが、悄然とするモニカの顔を想像するのは容易かつた。

モニカの手を、頭を振って否定するユリアン。

「モニカ様のせいではありませんよ。悪いのはゴドウインと、勝

手に傍を離れたおれ 私です」

「……ユリアン」

「貴方の傍を離れた件、危険に合わせってしまった件、不安にさせてしまった件、ミカエル様の二時間だけ外出という命令を遂行できなかった件」

ユリアンは輪郭すら見えないモニカを見つめ、頭を下げる。

「申し訳ありませんでした」

もしここから生きて帰れたら、シノンに帰ろう。ユリアンはその心を決める。

「ですから、モニカ様は何も悪くないんです。悪いのは命令を遂行できなかった私で」

「ユリアン、貴方は、命令だから私を守ってくださいるのですか……？」

ユリアンの話しを遮り、モニカは唇を震わせて言った。

「お兄様の命令だから……お茶をしてくれるのも、一緒に話しをしてくれるのも、一緒にお花に水をあげるのも、出掛けるのも……全て私の命令だから、ですか……？」

「いいえ！ それは違います」

不安そうに尋ねるモニカを、ユリアンは声を上げ否定する

「最初は、恐らく同情でした。ミカエル様に玉座に呼ばれ、侍女がいなくなりモニカ様がたった一人になると聞かされた時、俺は自分が退屈凌ぎになれるならと思いました。ですが」

ユリアンは一拍置いて言った。

「そんな考えは最初の一週間で吹き飛びました。ミカエル様に、侍女に、兵士に、庭師に、馬飼いに、出入りの商人に、モニカ様の事を嬉しそうに語る皆の話しを聞いたとき、俺がどれだけ驕っていた事を考えたのかに気付いたんです」

「ユリアン……」

「命令というの無いとは言えません。でも、それは、ミカエル様に限ります。俺は今まで一度たりともモニカ様のお願いを、命令と捉えたことはありません。モニカ様は今でも仲間だと思ってますから」

ユリアンは言い切った。ともすれば主従関係をどうでもいいと無視する反逆とも言える言葉であったが、そのユリアンの本心はモニカに大きな衝撃を与えた。

胸に溢れるのは歓喜。モニカは本心を見せてくれたユリアンに、自分の心を曝け出す。

ユリアンの手を両手で握り、祈るような気持ちを込めて乞う。

「……モニカと、呼んでください」

「！」

「お父様が亡くなり、そう呼んでくれるのは兄だけです。他の方は、誰も主従を気にして私の事をそう呼んでくれる方はいません。ですから仲間だと思っのなら、そう呼んでください」

モニカのお願いに、ユリアンは口ごもる。何度かモニカの手と闇に隠れて見えない顔に視線を向ける。そして意を決して名を呼んだ。

「も……モニカ」

「もう一度」

「モニカ！」

「はい……ユリアン」

自分の名前を呼ぶユリアンに、モニカはにこりと笑った。その時、外から話し声が聞こえた。

「はい……ここ……辺りで人の……が聞こえて……で……これで」

「そ……感謝す……城に……褒美が……」

「いえ……構です……では先を急……します」

「そこにいますか！ モニカ様、ユリアン！」

外から自分達を呼ぶ声が聞こえ、ユリアンも負けじと大声を上げる。

「お〜い、ここにいるぞ〜！ 助けがきましたよ、モニカ……様」

「残念ですが仕方ないですね。 また二人っきりの時にモニカって呼んでください」

ユリアンの様づけに苦笑しつつ、救助を待つモニカの脳裏に、ふと先ほどの声が過ぎった。 しかし、掘り返され頭上から届く陽光とともに、すぐにその考えが頭から消える。

今、兵士を誘導してくれた声と、悪鬼に襲われた時に励ましてくれた声、似ていた気がした、と。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9598y/>

---

SaGa-Your song is my song-

2011年12月11日13時50分発行